



CLARITY

第一部  
[上]

溪美居堂くまら

— デウインによれば、龍は非常に美しい生き物だという。ヘビのような胴体に四肢を備え、何よりも硬いうろこで覆われているというところまでは、彼らのいう龍と我々が認識する龍は似通っている。しかし彼らはそのうろこを宝石にたとえ、あるいはデウイン一流の比喻で、冬の空気の澄明さにたとえる。我々の知る、砕いた石炭のような無骨なうろこを備えた生き物とは大違いである。少なくとも、フェルス紀元1075年の「呪術師戦争」の前後に見かけられ、デウインに狩られながらも1595年の「龍戦争」に至るまで生きのびた龍は、彼らの主張とは異なるものだった。

これについて、フラムは「呪術師」一派が龍に呪いをかけ、イメア輝石を探させたとする説を唱えている。つまり、伝説にいう「古き生き物」としての龍がいて、それを「呪術師」たちが歪めたとする説である。「塔の賢者」ジルニトルの所有していた古文書の中に、龍族というべき一族の王から、デウインの長アルフリクに対して抗議がおこなわれたという一文があったという。残念ながら、現在この文書は行方がわからなくなっている。

これに対し、オリジナルの龍の姿を見たという信頼できる証言者がいないという理由で、龍は「呪術師」の手になるもので、伝説はあくまでも伝説とする説もある。

フラムの説に賛同する者は「龍戦争」終結から100年以上の時が流れても、龍族がひそかに存在していると考えている。実際、それが嘘つきであったり、コルのビールに酔いしれた者でないかは不明だが、龍を目撃したという話は毎年のようにドウニアのいずこかで起きている。

しかし、フラムの説に反対する者たちは、その創作者である「呪術師」が滅びた時点で龍も生まれなくなり、「龍戦争」の悪龍シルシュは最後の生き残りだったと考えている。—

ハールは読みかけの龍に関する書物から目を上げた。

白いものが混じり始めたひげを海風にたなびかせながら、風采のよい男が船から下りてくる。色数の少ない地味な装いながら、その上質な素材が彼の持つ気格と響きあって品のよさを醸し出している、そんな男だった。ハールはにっこりと笑った。

「ご苦労だった、アソル」

「おお、若」

アソルは柔和な顔いっばいに笑みをひろげた。

「また大きくなりましたな。おいくつになりましたか」

こどもに言うような口調にハールは笑いだし、

「先月、17歳になった。来年には成人の儀式だぞ」

と言いながら、親しみをこめてアソルの肩を抱いた。

彼の妻フリッドはフロージュン亡き後、アルドリドの家政を切り盛りしてくれた乳母のような存在であり、父アードルの従兄弟に当たるアソルは、もうひとりの父のような存在だった。

「それでは、ぜひともタウルにお役を替わってもらわねば。若の成人の日に、イエルズでまぬけどもと嫌味を言い合っているのでは生きた甲斐がない」

アソルも楽しげに応じた。冗談めかしているが、こどものいないアソルにとって、ハールの成長にかける思いは真実に生き甲斐かもしれなかった。

ハールはわざとらしく声を低め、

「タウルには言わないほうがいい。今度は仮病で寝込んでしまうぞ」

と言って片目をつぶった。六年前の大嵐で重傷を負って一時は元に戻らないと思われたタウルだったが、すっかり元気になり、昔同様、アルドリドの館を宰領している。皆それを喜んで、しょっちゅう冗談の種にしていた。

「あいつめ、いよいよお館に根を生やしましたな」

大笑するアソルの後ろをいくつもの荷が運ばれてゆく。コルの豊かな農産物と引き替えに持ち込まれる物品の数々だった。

コルはつましい島とは言いがたい。これもドウニアでコルが「不思議な島」と呼ばれる原因のひとつだが、武具や書物には費用を惜しまない気風がある。また衣服や調度などにも上質を求め、イエルズの高官あたりに言わせると「身のほど知らずの田舎者」となる、一種の高級志向があった。

自ら育てた麻や綿を手織りで用いているのは一部だけで、庶民であっても北ヴァリスの精緻な刺繍がほどこされた布をあしらったり、アイシアの毛織物を取り入れたりしている。よいものならば何でも買うと言われるコルで、輸入されないのは「宝石の王」ユーヴァルくらいのものであった。

そうした国情に応じ、こすからいイエルズの役人や御用商人とやり合って正当な交易品を持ち帰るには、やはり領主に近い人間が交渉に当たるより他なかった。家政を任されたフリッドがやりやすいよう家宰は夫に、というアードルの意向で、一時タウルと役職を交換したアソルだったが、もともと長きにわたって交易を担当してきたのは彼である。タウルが病床に伏して以来も通りの仕事に戻り、タウルの時よりも多くの交易品を獲得して帰ってくるのが常だった。

「それにトゥーリッドが怖いぞ」

ハールはますます可笑しそうに言った。

「はて、なぜトゥーリッドさまに叱られますかな」

「あれもじきに12歳になる。本人はいっぱしアルドリドの女の束ねのつもりで、今やフリッドが気を遣うありさまなのだ。フリッドが家政をみていた頃と同様に戻そうとしたら…」

「おお、怖い、怖い。我が女房にまさる御方に勝てるはずがありません」

機嫌よく冗談に興じていたアソルの顔がふと引きしまった。その視線の先には、船から下りてきたふたりの男の姿があった。

アソルの視線を追って、ハールも見慣れぬふたりの男を目に捉えた。ひとりには痩せぎすで背が高く、ひとりには中肉中背といった感じだが、ふたりともよく見ると隙のない動きをしている。

「フェルスからの使者です」

アソルがささやくように言った。ハールは見開いた目をアソルの面上へ戻した。対岸のイエルズからは、交易の関係でしばしば人が渡ってくる。しかし、フェルス王国の人間は初めて見る相手だった。

ハールに気づいたのか、背の高いほうが会釈を送ってきた。ハールも軽く礼を返した。

「お引き合わせはお館でいたしましょう。殿がお待ちです」

アソルがどちらにともなく大声で言い、四人は押し黙ったまま、アソルを先頭に港の喧噪の中を抜けて、宿屋の脇にある馬小屋へ向かった。

背の高いほうはまっすぐ前を見て動かないが、後に続く中背のほうはあたりをきょろきょろ見回したり、コルの青い空を仰いだり、落ち着きがない。ちらちらと最後尾のハールを盗み見る目には、隠しきれないいたずらっ子のような輝きが宿っていて、ずいぶん陽気な男らしかった。四人は馬に乗り、領主の館に着いた。ハールが驚いたことに、アドールは一行の到着を承知していたかのように、アヴァラルやタウルなど、コルの主だった者を並べて使者を迎え入れた。

「痛み入ります」

背の高いほうがぼそりと言った。使者の割には口が重そうな男である。

一行はそのまま、領主の謁見に使用される広間へと進んだ。港の倉庫の点検がてら、アソルに会って行こうとしただけだったハールは遠慮しようとしたが、ついてくるようアドールに目で命じられた。

アドールが段上に据えられた椅子の前に立ち、嫡男ハールはじめ重臣たちが居並ぶと、背の高い男がふたたびぼそりと言った。

「我らは使節ではなく、お迎いの護衛に過ぎません」

「承知しておる。さきほど、レギン王ご自身から御意はうかがった」

アドールは謎めいた返事をしたが、男は淡々と、

「では、いつご出発なさいますか」

と訊ねた。アドールは破顔し、

「まずは本人に説明せねばなるまい。...ハール」

突然呼びかけられ、ハールは戸惑いがちに目を上げた。

「コルからフェルスへ曆をお贈りしていることは、そなたも承知しているだろう。レギン王はその使節にそなたをご指名だ。フェルスの都へ行ってみるか」

アドールの言葉はハールの思いもよらないものだった。

「兄さま、フェルスに行くって本当？」

井戸の石組みに腰をかけ、汲み上げた水に杯をくぐらせたとたんにトゥーリッドの声が出た。顔を上げると、細腕に籠いっぱいの野菜を抱えたトゥーリッドが立っていた。フェルスからの客人をもてなす準備に追われているらしい。ハールは立ち上がり、妹の手から野菜の籠を取った。

「アルドリドの直系が島を離れた前例はないはずだ。わたしも大陸を知らぬまま一生を過ごすと思っていたのだが」

アドルはむしろレギン王の指名を喜んでいるように見えた。

「レギン王にはいろいろと不思議な噂がある。フェルス王家に混じった“古き者”の血が濃く現れた人物とも、カラスを従えた魔法使いであるとも、実はそのカラスは王ご自身であるとも、その恐るべき瞳で人の心を読むともいわれる」

冗談めかして噂を並べたあと、

「わしにも真実はわからぬが、王が“夢使い”であるのは本当だ。時に王は夢を渡し、各国の主たちと直接会われる。わしの夢にもお見えになって、じきに使者が参ると告げられたのだ」

ハールをはじめ事情のわからない者たちに説明し、

「これで執務中の居眠りが露見してしまったな」

とまで機嫌よく続けて笑った。背の高いフェルス人以外、後ろに控えた中背のほうも含めて一同が笑いに包まれた。そのなごやかさの中で、ハールのフェルス行きが決まったのだった。

「ありがとう、兄さま。でもわたしはもう、こどもじゃありません」

きっぱりと言ったトゥーリッドはハールから野菜籠を奪い返した。それから、

「では、フェルスの大学も訪ねるの？」

と問うた。言われてハールもはっとした。＜グーダ＞の跡継ぎの倅として、ヴィトは2年前からフェルスの大学で学んでいる。フェルスへ行くということは、もっとも親しい友に会えるということだった。

「そうか、そうだな。ヴィトがいるのだから訪ねたいものだ。フェルスの王も否やとはおっしゃるまい」

ハールはうれしそうに言った。明るんだ兄の顔を見上げるトゥーリッドの頬にほのかな桜色が差した。

その手から野菜籠をひったくり、

「お前にまかせてると日が暮れるな」

突然現れたフィニアンがトゥーリッドをからかった。フィニアンも14歳になって身体は大きくなってきたが、次男の気楽さからか、領主家唯一の女性として気を張っているトゥーリッドよりも、こどもっぽいところがある。

「ちょっと、兄さま、待ちなさい！」

腹を立てたトゥーリッドに追われて駆け去るフィニアンを笑みを浮かべて見送り、ハールは井戸へ戻ろうときびすを返した。すると少し離れたところに背が高くないほうのフェルス人がいて、

兄妹の追いかけっこを眺めていたのだろう、笑いながらこちらを見ていた。

フェルス人は笑いを引っ込め、ハールに向かって会釈した。あらためて見ると若く、ハールともそれほど変わらないように見える。礼を返し、話しかけようとしたハールはふと詰まった。相手の名すら聞いていない。妙な間が空いたあと、フェルス人はどっと笑い出した。

「なるほど、お困りでしょう。あの御仁、お引き合わせはお館で、などと言っという、とうとう名前もお知らせせずに行っちゃいましたからな」

ハールは新鮮なものを見る気分で彼を見つめた。思えば、コルでは彼は常に領主の嫡男であり、ざっくばらんに近寄る者はいない。ハーコン一統のような悪意的な不作法でもなく、単にかしこまらない態度というのは初めてかもしれなかった。

「失礼しました」

ハールが黙ったままなので、さすがにまずいと思ったのか、フェルス人が頭を垂れた。

「俺たちは、兄貴が言ったとおりただの護衛兵で、庶民なので、王族に対する礼儀を知らんです」

「あ、いや、かまわない」

あわてて手を振ってから、ハールはあらためてフェルス人の言葉に目を丸くした。

「兄貴？ あの無口な使者と君は兄弟なのか」

「そうです。あれはアルドーといって、俺の同腹の兄です。俺はケルドー、兄貴ともども、フェルスリグの守備兵のひとりです」

同腹の、をやや強調してケルドーはにやりと笑った。言われ慣れているのだろう。ハールもつり込まれて笑い、

「似てないな。君は兄のぶんまでしゃべるのか」

めずらしく軽口を叩いた。するとケルドーはすました顔をして、

「はい。王子さまが弟君のぶんまでしかめ面をなさっているのと同じですよ」

と答えた。ハールはふたたびケルドーをまじまじと見た。面白い人間だと思った。

「君はきっと、レギン王が相手でも同じように話すのだろうな」

「はは、王さまには道化者と言われております」

ハールは軽く首をかしげた。さきほどケルドーは「フェルスリグの守備兵」と言った。首都の城壁を守っているのだろう名もない兵が、王と親しげに話しているはずはない。

「君の持ち場はどこなのだ」

遠回しにハールが問うと、ケルドーは打てば響くように、

「王さまは気に入った兵を夢でお呼びになります。俺も兄貴も、王さまに呼ばれた“夢の護り手”です」

ずばりと答えた。面白いばかりでなく、頭の切れる男らしかった。

「俺なんぞにはよくわかりませんが、王さまには秘密が多い。いや、フェルス自体が古くて秘密だらけの国です。近衛兵や親衛隊を使いたくないって時に、こっそり王さまにこき使われるのが俺たちですよ」

ケルドーはおどけて嘆いてみせた。ハールはまた笑った。ヴィトとはまた違う相性の良さを感じ

じる。

「ああ、だからって俺たちが居眠り常習犯ってわけじゃないですよ」

くるくるとよく動く目を丸くしてさらにハールを笑わせたあと、少し表情をひきしめ、

「さっき、この王さまは居眠りだなんて冗談をおっしゃいましたが、うちの王さまが捕まえるのは一瞬の間なんです。ふっとわけがわからなくなって、もう王さまと対面してる」

とケルドーは説明したが、体験したことのない者にはわかりにくい話だった。ハールは頭の中のさまざまな記憶を引き出して、

「デウィンの一部には、動物と心で話す者がいたという。それは相手と対面し、まなざしから心をすべり込ませる技だと聞くが、それに似たものかな」

訊ねてみたが、今度はケルドーが首をかしげた。

「俺にはそっちがわかりません。ま、そのうち王子さまの夢にも王さまがお出ましになるでしょうから、そうすりゃわかりますよ」

「そうかな」

ドゥニアの束ねとして、コル島を含めた国主たちのもとを訪れるレギン王であってみれば、いずれハールがコルの領主になれば夢でまみえることもあるだろう。しかし、ハールが領主の座を継ぐ日はまだまだ先の話である。レギン王がそれまで存命とも限らない。ところが、

「そんなに先の話ではないと思います。俺たちが遣わされたのが証拠ですよ」

またもハールの心裡を読んだようにケルドーが言った。確信ありげな口調に、ハールが不思議そうに目を上げると、

「自分で言うのも何ですが、王子さまをお迎えにあがるのに、ただの守備兵なんぞ来るわけありませんよ。俺たち、コルの王族に決して無礼がないようにとくり返し念を押されたくらいですから」

ケルドーは何度も頷いた。

そして突然、

「レギン王は、ハール王子を死んでもお守りしろと命じられました」

別の声言い、ハールは思わず身構えるほど驚いた。井戸の巻揚げ機の陰になって姿が見えなかったアルドーが進み出て、

「失礼しました」

ケルドーの明るい声とは似ても似つかぬ声で詫びた。

黒衣の背の高い人影が遠くに見える。

レギン王だろうかとハールは思った。これが夢であることはわかっている。眠っているながら胸が高鳴った。ともあれ近づこうと、夢の中の曖昧な空間をハールは進んだ。ところが近づくにつれて、人影の背丈は小さくなっていった。黒衣と見えた衣装も、だんだんと色みを帯びて、アデリスの絞り染めをほどこした絹ものだとわかってきた。訝って立ち止まったハールへ向かって、人影がふり返った。

「トゥーリッド」

ハールがつぶやくと、トゥーリッドの面影をもつ顔が花のほころぶように笑った。どこか記憶の中にあるフロージュンにも似て、やがてトゥーリッドはこんな顔で笑うのだろうかと思っただろうかとハールは思った。そしてそうなった時、彼女の最高の笑顔を向けられるのは自分ではない、とも思った。すると幻の顔が揺らぎ、妹でも母でもなくなって、それでいて何かうつくしいものへと変わろうとした。

その時、甲板から聞こえていたざわめきが急にはっきりと耳に飛び込み、ハールの目を覚ました。船室の中は薄暗かったが、小さな明かり取りの窓からは日射しが入っている。少し寝過ごしたようだった。

作りつけの寝台の脇に置かれた小さな机の上を眺め、ハールは口許をゆるめた。

船に乗り込む直前、ハールはトゥーリッドに袖を引っぱられた。父や次兄から離れるまでハールを引っぱって、トゥーリッドは小さな包みを彼に手渡した。

「兄さま、大学へ行くのなら、これをヴィトに渡して欲しいの」

「中身は？」

トゥーリッドは少し迷ってから、

「押し花よ。コルの野原や草花が恋しいんじゃないかと思って」

と打ち明けた。ひょっとして、自分やフィニアンだけでなく、ヴィトも幼いトゥーリッドの花遊びにつきあわされたのではないか。そう思ったハールは、

「ヴィトには暗い思い出かもしれんぞ」

と妹をからかおうとした。しかし、ぱっと顔を赤らめたトゥーリッドを見て、ハールは言葉を失った。初めて、本当にトゥーリッドが幼い妹ではなくなってゆくことをハールは知った。

ヴィトはどんな顔でこれを受け取るのだろうか。ハールは机の上の包みから目を外し、すぐに服を着替えて船室を出た。

見れば甲板の一部に人だかりができて、てんでに海のほうを指さして何やら騒いでいる。何かと目を細めて見つめていると、

「浮島を見たようです」

突然、背後から声がして、ハールは反射的にすばやく向き直った。その目の前にはアルドーがいた。船室の扉の前で不寝番をしたものらしい。

ハールは息を吐いて小さく笑った。まだまだ若年とはいえ、ハールもコルの猛者たちに鍛えられ

た武人である。隙があるとは自分でも思っていない。しかしアルドーは常に、話しかけられてうるたえるほど何の気配も感じさせなかった。

「ずっと見張っていたのか」

「王子をお守りしろと命じられましたから」

ハールは肩をすくめた。

「ほんの言葉のあやだろう。ドゥニアの人間がコルをどう見ているか、我らも承知している。身のほどを知らぬ田舎者、武人氣取りのおかしな農夫、などと書物にすら書かれているからな。まして、若輩のわたしに王のご厚情を受けるいわれはないはずだ」

「レギン王は無用なことは仰せになりません」

短い言葉が返ってきた。ハールはアルドーを見つめ返した。さすがにドゥニアを束ねる王だけあって、レギン王にはいかなる偏見もなく、誰にでも厚い礼遇を与えるのかもしれない。しかし、それにしてもアルドーたちに与えた命令が厳格すぎるように思われる。言葉を選ぶ人物だということならなおさらだった。

「なぜだ」

アルドーの目を見据えてハールは問うた。アルドーはまじろぎもせず、黙ったまま動かない。

「何をにらめっこなんかなさってるんです？」

ケルドーが駆け寄ってきた。

「しかも兄貴なんかと。勝てるわけないですよ、兄貴の笑顔なんて俺にも思い浮かびませんからね」

「アルドーにはいつも驚かされる、気配がまったくない。たいしたものだと思ってな」

表情をやわらげたハールは当たりさわりなく言った。

「兄貴は誰よりも影が薄いんですよ。おかげで王さまに目をかけていただいてるんです」

ケルドーはそう言って笑った。

「浮島は」

まったく場にそぐわない声で、ぼそりとアルドーが訊ねた。ケルドーはおおげさに手を広げ、

「本当に見えたものかどうかもわからんよ。水夫のひとりが騒ぎ出したただけだ。浮島がうろうろするには、ちっと陸地に近すぎる気もするしな」

どうでもよさそうに答えた。

「浮島とは？」

ハールが訊ねた。

「正体はよくわかりません。10年ほど前から船乗りのあいだで噂になってるんですが、城壁みたいなもんがある島で、動くんだそうです。見かけると嵐になるとかって話もあって」

「嵐か」

ハールの脳裏にタウルに重傷を負わせた謎の嵐が浮かんだ。

「ただ、向こうさんでもこっちを避けてるらしくって、陸地の近くなんかじゃ見かけないって言います。ここは、ほら...」

ケルドーが指さす先、青い海がどこまでもひろがるその片隅にぼんやりと影が見える。

「あのへんがノーアトン港です。陸は近いし、行き交う船も多すぎる。浮島の主の好みじゃなさそうだと思いますがね」

「ほう、あれが...」

よく知らない浮島よりもイェルズの港のほうに興味をひかれ、ハールは目をこらした。交易を担当するタウルやアソルは、あそこでイェルズの役人や商人と交渉を重ねてきたのかと思った。とはいえ、波間に細い影が見えるだけではさしたる実感も湧かなかった。

「もう少ししたら、はるかスニルベオルの山容がご覧になれると思いますよ。あれがなけりゃ陸路って手もあるんですが」

「海路のほうが安全だ」

アルドーが口をはさんだ。ケルドーは笑いを含んだ目でハールをちらりと見てから、

「どうだか。名にし負う“ヴァーグの潮”みたいなもんだってあるだろ。コルにうかつに近寄ると沈められちまうんだぜ」

と言い返した。ハールはにやりと笑った。

“ヴァーグの潮”はコル島の周辺の強い潮流で、複雑に流れが変わるため、慣れない船が近寄ると流されてしまう。もっとも悪い流れに乗ると“シルの岩場”に運ばれ、岩礁にぶつかって沈没するのがおちだった。100年余り前のイェルズとの戦争で、コル軍は攻め寄せたイェルズの船を誘導して“ヴァーグの潮”に乗せ、壊滅的な打撃を与えている。ドウニアで「コルの奇跡」と呼ばれる勝利の要因となった作戦だった。

「シオールにはそんな潮流はありませんから、ご安心を」

ケルドーは茶目っ気たっぷりに片目をつぶった。

ケルドーの言葉どおり船旅は順調に進み、翌日の明け方には港へ入った。

ハールは船首から初めて見る他国の街を眺めた。海に面した建物のうち、いくつかはコルのものに似ていたが、多くはあざやかな配色の大きな屋根を備えた、見慣れない建物だった。コルの広場にある鐘楼よりもはるかに尖った塔がいくつもそびえ、母屋の屋根と同じく派手な屋根が空を突き刺しているようだった。

船が接岸すると、多くの男たちが船に近づいてきた。コルからフェルス王室に贈られる数々の品を積み下ろすため、ハールは船首で待機したままそれを見下ろした。

男たちは褐色の肌をしていて、たいていの者が頭を剃り上げている。着ている服も、アルドーたちとはまったく違うものだった。ゆったりとした長衣にガラスや金属でできたビーズを幾重にも飾り、革のサンダルをはいている。ものめずらしさに、ハールは荷を肩に載せて歩く彼らの姿を見ていた。

すると、ひとりの背の高い男が褐色の隊列に割って入った。見たところ、特に隊列を妨害する意図はなかったようだった。遮られた人夫たちが口々に罵っても、男は何もなかったように、ただまっすぐ歩いて行くだけだった。荷物を奪われたわけでもないため騒ぎはすぐに収まり、人夫たちはまた荷物を運び始めた。

ハールはなんとなく、その背の高い男を目で追った。男はするすると歩を進め、岸壁の端まで進むと不意に消えた。ハールは思わず身を乗り出した。水音が聞こえたような気もしたが、岸壁の下の海には誰の姿もなく、海に転落した者が溺れているようすもない。埠頭と船のあいだで複雑に揺れる波間に白い影が走ったようにも見えたが、光の加減かもしれなかった。

「王子さま、どうなさいました？」

ケルドーが甲板から上がってきた。ハールは首をかしげ、

「いや、見間違いだろう」

と答えてケルドーと向き合った。

「荷運びの者たちはフェルス人なのか？」

「いえ、彼らはルマの者たちです。ここはシオールの港ではなく、ルマのクル港なんですよ」

ケルドーは下を覗き込んで言った。

「ルマなのか」

ハールは目を丸くした。

ルマ人たちの話はハールも知っている。遠く南の海から渡ってきたといわれ、ドゥニアの南東に住み着いた種族で、コルやドゥニアの国々とは違う文化を保っているという。

「ルマ人がここに住むのはかまわないが、暗愚王エアランの遺したものかと思うと情けなくもなります」

はるか下方で作業する人々へ目を落としたまま、ケルドーはひとりごとのように言った。

「龍戦争か」

ハールが即答すると、ケルドーはにっこり笑い、

「よくご存知で。ミーラントで落馬して沼にはまったまぬけな王を助けたのが、ルマの族長ザガスって人物だったそうで、エアランが王位を奪われる前に、この土地を自治区としてルマへ渡したんですよ」

「よくターニットが黙っていたな」

「ヴァリスの女傑は自分がすぐ追い落とされましたからね。今でも南の“荒れ谷”では槍を片手に駆けまわっているそうです」

「では、あの話は本当なのか」

ハールはいよいよ目を丸くした。

「フェルスには亡者の集まる荒野があって、そこではとうに終わった古の戦が今でも毎夜おこなわれている...、おとぎ話の類かと思っていたが」

「夜だけならいいんですがね。ここ数年、昼間でも亡者と出くわすことがあるともっぱらの噂で、“荒れ谷”に近い大森林の街道は怖がって誰も使わなくなりました」

ハールは少し考えてから、

「ボードリク王も現れるのか。エアランと争った王だ」

と訊ねた。ケルドーは頭をひねった。

「4世ですね。たぶん出るんじゃないでしょうか、一番恨みつらみがありそうな御方ですからね。しかしまあ、俺も噂しか知らんのです。誰がうろうろしてるかは、フェルスリグで商人たちにお訊きになるのが一番ですよ」

「なるほど」

さりげなく答えながら、ハールは内心ケルドーに感心していた。庶民であり、武芸を見込まれて“夢の護り手”となったのだらうに、歴史上の王たちや王位継承戦争の詳細まで承知しているらしい。やはりただの道化者ではなさそうである。

甲板から階段を駆け上がる音がして、

「王子、ルマの頭領シュブールどのが挨拶にお越しです」

現れたアルドーがささやくような声で言った。

ハールが返事をする前にアルドーは言葉を継いで、

「クルで上陸することをお許してください。レギン王のご指示です」

手短かに説明し、

「シュブールどには王子の身元を明かしておりません。これも王のご指示によります。フェルスへ向かうコル王のご使者としてのみ、お会いくださいますよう」

存外よく回る舌で言うと、頭を下げた。ハールは頷き、

「レギン王のご意向を騙れる者はおらぬ。言うとおりにしよう」

と答えた。

ハールなりに兄弟を観察して、疑う必要などないことはわかっている。むしろ彼らには好意を抱き、友人のように接しているものの、見えづらい状況への多少の苛立ちはあって、言葉尻をとがったものにしてしまった。

はっとかしこまり、アルドーはますます深く頭を垂れた。不興の言葉を上手くはね返すような芸

当は彼には望みようもない。気まずい沈黙が垂れ込めかけたところへ、

「王さまにも困ったもんです。常にシュアックの結末がわかってるやつとは遊べんでしょう。気分が悪くなりますよ」

手を振ってケルドーが笑った。シュアックは戦場を模した駒遊びの名である。ハールは苦さを残した笑みを浮かべた。

「よい弟だな。いつまでも幼い我が弟とは大違いだ」

「それは違いますよ、王子さま」

ケルドーが真面目な顔になった。

「王子さまも妹君も大人であろうとばかりしておいでです。弟君は心痛なさっておいでなのですよ」

ハールはケルドーの顔を見つめ直した。フィニアの行動をそんなふうにしたことはなかった。

「俺もやっかいな兄貴を持てますんでね、よくわかるんです。あ、“も”って言っちゃった」ケルドーの言葉にハールは吹き出し、アルドーも顔を上げた。表情には表れないが、ほっとしているようにも見える。

「それにしても…」

ケルドーは目をくるりと動かして、

「シュアックの達人は何をお考えなのでしょうね。王子さまになるべくいろんな地を踏ませ、人に会せたいようなのに、一方で王子さまを隠そうとしているような…」

最後はつぶやくように言った。ハールはにっこり笑い、

「君はやはり鋭いな。どのみち、我々は王の駒らしい」

といくらかおどけて肩をすくめ、ルマの頭領に会うべく甲板への階段を下りた。

褐色の男たちが居並んで作った路を通り、ハールは港の奥の広場へ向かった。船の上から見るより彼らは大柄で、ちょっとした壁のように感じる。見慣れない姿形も手伝って威圧的に見えなくもないが、つつましく目を伏せて立っている者がほとんどだった。

人でできた通路の端にまっすぐハールを見ている者がいる。首や腰に巻いた金属のベルトの数や質から、かなりの身分の者らしかった。

「コル王のご使者、どうぞこちらへ」

胸に右手を当てて、彼は深く頭を下げた。そしてそのままの姿勢で、左手でハールを招くようなしぐさをしつつハールの脇を歩いて案内していく。顔を上げたらどうかと言いたかったが、ルマは自分たちとまったく違う種族であることを思い出して、ハールは沈黙を保った。

広場の真ん中に大きな天幕が張られていた。見渡せば、広場には誰もいない。おそらく、この天幕のために皆が追われたのだろう。荷下ろしや取引の喧噪の中を歩くのに慣れているハールは落ち着かない気分になった。

案内してきた男がいつそう恭しく頭を下げ、天幕の入り口を引き上げた。ハールは軽く礼を返し、中へと踏み込んだ。

天幕の中は透き通るような薄絹に極小の金飾りを無数に縫い付けた布が張られ、伝説の巨鳥のものだろうかと思う大きな羽根がいくつも交差して飾られている。床には複雑な織りの毛氈が敷きつめられ、きれいなクッションがいくつも積まれて、とてもにわか作りのものとは思えなかった。

金銀で刺繍をほどこした大きな座椅子にゆったりと座った人物が、愛想のいい顔で手を広げた。

「お役目ご苦労。わたしはルマの頭領、シュブールと申す」

ハールはどうしたものかわからず、突っ立ったまま頭を下げた。シュブールはほわほわと笑い、

「コルの方に会うのは初めてだ。豊かなよいお国と聞いてはいるが」

話ながら、手で正面に置かれたクッションをすすめた。床にじかに座った経験はあまりなかったが、ハールはシュブールの足の組みかたを真似て座ってみた。

「そこもとは、フェルスに行かれるのは初めてか」

「はい」

「そうか。実は、わたしも行ったことがない」

何がおかしいのかシュブールはけらけら笑い出し、ハールもなんとか笑顔を作った。

「王の都を見てみたいものだがな。守らねばならぬものがあるゆえ...」

ちらりとハールの表情に目を走らせ、

「コルの王も動かれぬ。やはりそれは...」

シュブールが言いかけた時、外でわっと何かの騒ぎが起き、入り口の幕が乱暴に開いた。

「何の騒ぎだ」

一瞬、怒りでふくれあがったように見えたシュブールの叱声は途中でしぼみ、ハールの脇を駆け抜けた小さな影がその胸に飛び込んだ。

「ナミル...」

シュブールは幼児を抱いたまま目を白黒させている。どうなっているのかわからないが、ともあれハールは笑いを抑えるのに専念した。

続けて女性が駆け込んできて、

「申し訳ございません、殿」

身を投げ出すようにして床に伏せ、シュブールに詫びた。

「父上がお見えと知るや、いきなり...」

「会いたかったんだもん」

シュブールにしがみついた男の子がわめいた。彼の左目の周囲に奇妙な赤黒いあざがあるのにハールは気づいた。さらにシュブールが何を言うひまもなく、天幕の外から、

「コル王のご使者！ お助けください！」

と叫ぶ声が聞こえた。驚いたハールがすばやく外へ出ると、ケルドーがぬかりなく剣をかまえて全員を睨めつけ、ハールを案内した男をアルドーが押さえ込んでいる。

「何をしている」

ハールの声を聞き、姿を見ると、ふたりは剣を収めて男を放した。

「何が起きたのかと天幕へ向かおうとしたら、邪魔立てするもんですから」

ケルドーがにんまり笑った。

「ファアル！！」

天幕の中から怒号が響き、アルドーの手を逃れた男があわてふためいて中へ飛び込んでいった。

「何をしておったのだ、客人の前でなんたる不始末！」

怒鳴り声に重なってこどもの泣き声が聞こえてくる。ハールとアルドー、ケルドーは顔を見合わせ、天幕の中へ踏み込んだ。

ナミルと呼ばれた男の子は母らしき女性の手に戻され、わあわあ泣いている。女性とファアルはそろって床に伏し、頭上から降る怒声を浴びていた。ハールと護衛ふたりの姿を見るとシュブールは怒鳴るのをやめ、不機嫌な顔で、

「失礼した」

と一行に詫びた。ところがナミルは鎮まることなく、

「父上はぼくを捨てる気なんだ」

泣き声をふりしぼって叫んだ。

「こんなあざができたから、もう要らないんだ！」

女性が必死になってナミルを押さえ込んだ。ハールがちらと窺うと、シュブールの顔は怒りでどす黒くなっている。捨て置くわけにはいかなかった。

「失礼ですが...」

言葉を押し出したハールを、シュブールはほとんど睨みつけるも同然の目つきで見た。

「あざとは、彼の左目のあたりのもののことですか」

「お若いご使者、それぞれの家にはそれぞれの事情がある。口をはさむものではない」

シュブールは傲然と言ったが、ハールはかまわず、

「そのようなあざなら、英雄ロヴァルの顔にもあったといいますが、ルマの御方はご存じないのですか」

「なんと」

シュブールの表情が一変した。大きく見開いた目にみるみる涙があふれてきて、ハールを驚かせた。

「善いことを教えてくれた」

流れ落ちる涙にもかまわず、シュブールはハールの手を握ってふりまわした。

「この子はわたしの、やっと授かった子だ。しかし、大きくなるにつれてあざが現れた。これを不吉と言う者が多くてな...、このまま跡継ぎに据えられるものか、悩んでおったのだ」

そしてシュブールはファアルに向かい、

「聞いたか。このあざは“呪術師”どもを滅ぼした偉大なる王ロヴァルと同じ、国を栄え富ます吉祥、二度と不吉などと申さぬようふれ回れ」

拡大解釈気味の命令を出すや、ナミルを抱きしめ、声を放って泣き出した。

感情表現が派手なのはルマ人の特徴らしい、とハールはやっと納得した。いつのまにかその場の全員が大声で泣いている。客人三人だけが当惑まじりの顔を見合わせていた。

数日間に及ぶ祝宴に招こうとするシュブールを、先を急ぐ身だからと振り切って、一行はようやくクルの港町を出た。

「とんでもない騒ぎに巻き込まれましたね」

ケルドーが天を仰いで言った。それからにやっと笑い、

「ところで、ロヴァル王にあざがあったなんて話は聞きませんが、どんな書物に載ってたんです？」

と訊ねた。ハールはそらとぼけた顔をして

「伝説に異説は付きものだ。どこかにはそんな書物もあるさ」

と答え、表情をあらためて、

「たかが皮膚の変色に過ぎぬものを不吉だ吉祥だなどと、くだらぬ話だ。あのナミルという少年の能力には何の関わりもない。だが、父に冷遇された思い出によって彼が他人の痛みを知るなら、よい統治者になるかもしれない」

と言った。ケルドーははっと表情をひきしめ、アルドーの瞳には強い輝きが点った。

ハールはふと思いつき、別の統治者のことを口にした。

「シュアックの達人は、この騒動も見越していたかな」

「さすがにそれはないでしょう...」

言いさしてケルドーは言葉をとめた。三人が三人とも、あり得るというように首をすくめた。

「古紀2035年ドゥニア戦争勃発。15年のち戦争終結、これが中紀元年」  
やや癖のある黒髪をぐしゃぐしゃにしながら、イエシリーは口の中でつぶやいた。  
あまり彼女に世間を知らせたくないようなソルーシュではあるが、そのくせ学問にはうるさい。  
特に歴史に重きを置いているらしく、イエシリーに与えてくれる書物も圧倒的に歴史書が多かった。

「中紀38年フェルス建国。人間の暦が作られる。フェルス暦15年は...中紀52年、“アルフリクの塔”建設される」

仕方なくぶつぶつ唱えているが、イエシリーにとって編年体の歴史は天敵に近い。フェルス建国のいきさつやアルフリクの志を知るの面白いけれども、それが何年なのかを暗記するのは楽しくなかった。

ドゥニアにはふたつの紀元がある。ひとつはデウインが定めたもので、人間がそれなりの文化を生み出す以前から使われているため、古代の歴史学習には必須のものだった。ところがさらにソルーシュが渡す書物の中には、もうひとつの年号を備えているものまであった。

「これは何？ オルムリンとか、ファブニルとか」

「年号だ」

ソルーシュの言葉はいつも簡潔だった。

「だって、他の本には紀元はふたつだって書いてあるよ。何で三つもあるの」

“も”に力をこめてみたが、彼はイエシリーを見つめるだけで口を開かなかった。こうなるとソルーシュは絶対に答えない。イエシリーは、あきらめて三つの年号を唱えることにした。

「えーと、これはファブニル65年、だっけ」

イエシリーは別の書物を覗き込んだ。

三つ目の年号が書かれている書物は、他のものと雰囲気が違う。どの本も皮革や金属や宝石で飾られ、本物の花が表紙に埋め込まれたものまであるが、これらは流れる砂があしらわれていたり、ページを繰るごとにさざ波の音がしたりして、明らかに魔法のかかったものだった。風変りな音声で呪文を唱えないと開かない書物もある。イエシリーが人間をよく知っていれば、とても人間の出せる音ではないとわかっただろう。

不思議な書物が発する潮の香りがかぐうち、ふと、目の前に海がひろがった。波頭が日射しをはじいて白くきらめき、うねりにしたがって碧の明暗が交錯している。

はっとしたイエシリーは、ヒューギンの目でものを見ているのを知った。彼女の侵入と我に返って峙（そばだ）った自意識が鷹の本能を妨げ、ヒューギンは失速して海へ落ちかけた。

（何をする）

（ごめん、退屈な勉強をしてたらバランスを失った。もう邪魔はしないから）

初めて鷹が飛んできた日から7年、イエシリーは鷹の胸に生えた羽毛のように自然に彼とともに飛び、思う場所へ導けるようになっていた。しかし彼の見聞を知るのはヒューギンが戻ったあと、その目から心をすべり込ませて読み取るにとどめている。ヒューギンの中へ入りすぎると、ふ

たつの意識がぶつかって身体のコントロールを失うからだった。

鷹が持ち直して飛行を続けるのを静かに見届けて、イエシリーはそこから離れた。

浮島の自分へ戻ると、目の前にあるのはあいかわらず、勉強しなければならない書物の山だった。

「フェルス暦912年、中紀949年、“呪術師”の一統がはびこり始める」

この時代、ドウニアで歴史を築いていたのはデウィンたちだった。しかしデウィンの書物はほとんどが失われ、残るものは「塔の賢者」ジルニトルのもとにあって、なかなか窺い知ることができないらしい。そのため詳細が知られておらず、イエシリーの手許にある書物でもずいぶん話が飛んでしまう。これまた古い歴史の学習がつまらなくなる原因のひとつだった。

ふたたび興ざめたイエシリーは、書物から顔を離してそっと目を閉じた。

デウィンは自分に合った石を持っている。ほとんどは先祖から伝わってきたもので、その石を通じて、同じ血の中に魔法を呼び覚ますといわれている。まれに先祖の石のどれかが合わない者もあるが、たいていは宝石や貴石の中から相性のよいものを見つけ、いくらか魔力には劣るが、魔法を使えるようにはなる。まったく不思議のわざが使えない者はごく少数とされている。

どれかの書物で読んだことを思い起こしつつ、胸元に飾った黄水晶に触れようとしてイエシリーははっと手を止めた。またヒューギンの内部に飛んで彼の飛行をかき乱すと困る。

中へ意識を入れないように気をつけながら、イエシリーは黄水晶をそのまましばらく眺めた。

黄水晶を手にした日、彼女の中で確かに何かが目覚め、それがヒューギンとマニンと呼んだのだった。ということは、自分はデウィンなのだろうか。

この浮島に現れた時、マニンはイエシリーの素性について何か話していた。しかし初めての意識の飛翔に疲れ果てたイエシリーはほとんどを聞き逃してしまい、それ以降のマニンは、イエシリーの教育方針で対立し、いがみ合いながらも、ソルーシュの考えを尊重するつもりらしく、はっきりしたことを語らない。

「わたしは、誰？」

いつからか、イエシリーの胸に巣くった疑問だった。

目が熱くなり、目の前が揺らいで、水がぽたりと落ちた。そうした「涙」の持つ意味をイエシリーは知らない。ソルーシュもマニンもヒューギンも泣かないからだった。

変なことが起きたというしぐさで涙を拭い、イエシリーは書物に戻ろうとした。ソルーシュは出がけに「戻ったら暗記したか試すぞ」と言い残している。退屈して他のことばかり考えていたと知れたら叱られるだろう。

「フェルス暦943年、中紀980年頃から龍が捕らわれ始める」

声に出してみたものの、イエシリーの脳裏には数年前の恐ろしい光景がひろがった。鈍色の空を飛び交う龍たちの姿、そして何より恐怖を感じたのは、そのうちの1頭を捕らえたおかしな光だった。

あの光を思い出したとたん、ぞくりと悪寒がした。イエシリーは寝台と壁のあいだにクッションを積み上げると、その中へともぐり込んだ。穴ごもりのような状態が一番落ち着く、イエシリーのお気に入りなのだった。

イエシリーが縋子（しゅす）の肌ざわりを好むので、クッションのカバーや身近な布類はだいたい縋子が用いられている。肌をすりつけてすべらかな感触を楽しむうちに、イエシリーはうとうとうとしてしまった。

薄緑色の空に黄色い太陽が輝いている。現れたのはデウィンらしい。足首まである長衣の上に数本の長い布を幾重にも巻きつけた、面白い服装だった。黄色い光が逆光になって、長い髪に覆われた顔は判然としない。それなのに、笑った気がした。

イエシリーはその人物のほうへ進もうとしたが、そこまでの空間は何か満ちていた。弾力のある塊に無理やり押し入っていくような感覚で、進むより押し返されるほうが多いほどだった。歪めた顔を上げてふたたび人物のほうを見ると、その陰にもうひとり誰かいるのが見えた。やわらかな身体の線は女性に違いない。手前の人物がその女性のほうへふり返ったはずみに、長い髪が銀色に光った。

その時、空が揺らいですべてが崩れた。ほんの一瞬、崩れ落ちる空の向こうに、いつか見た薄青い瞳と同じ色の空が見え、黒衣の人物が小さく望めた。彼の燃える石炭のような目で射貫かれる直前、イエシリーははっと目を開けた。

「デウィンの大半はドウニアを去った。人間はあれの同族ではない。なぜ関わる必要がある」  
「あの子の母親がそうしていたからさ」

ソルーシュとマニンの声が聞こえ、イエシリーは身を固くした。

「デウィンは人間を愛しんだ。戦争と、龍とのごたごたでこの地を去る者が多かった中でも、リフィアの家系はずっと人間を助けてきたんだよ。最後に残った<エイル>としてね」

「リフィアが人間の世を去って数十年に及ぶ。血眼で探す者はいなかったはずだ」

「デウィンのすることに口を挟める人間がいるかい。仕方ないとあきらめてるだけさ」  
しばらく豚の鼻息だけが聞こえた。

「あたしはあの子自身の心配をしているの。<エイル>の血がどんなふうにあの子を呼ぶか、あんだってわからないんだろ。それに、自分自身が何者かわからないなんて、あなた、耐えられるの？」

マニンの声が微妙にふるえた。

「忘れてしまいたいことはあっても、自分自身だから正気でいられる。あの子も、いつまでも自分に疑問を持たないこどもじゃないよ。苦しめないで...」

「お前がよけいなことを言わなければ、疑問に思わずに済んだのだ」

言葉をさえぎり、ソルーシュが声を荒げた。

「あれには決まった道があるのだ。そのためにはあれを隠す必要がある。あれ自身からも隠したほうがいい。必要なことはわたしが知らせる」

豚が盛大に鼻を鳴らす音が響き渡った。

「それはあなたの考えだね。あなたの父親は何も言わないのかい。だとしたら、あの子のことなど考えてないんだね」

マニンはびしりと言い、さらに、

「あんだって、まだ水蛇だ。命短い人間よりは見聞があるかもしれないが、こどもに変わりは

ない。あの子を気に入りのおもちゃのように扱ってることがわからないのかい？ あの子にはあの子の人生がある。あんたは何もかも奪って閉じ込めようとしてるだけだ」

イエシリーまでが息を詰めてしまったほどのことを言い切った。ソルーシュは応えない。そのままにらみ合いでもしているのかと思った時、

「隠してやりたい気持ちはわかる」

意外にも、マニンはやさしい声音で言った。

「あの子の生まれは複雑すぎる。リフィアだってずいぶん悩んでいたよ」

複雑という言葉がイエシリーを動かした。もっとよく聞きたい、ようすを見たいとと身動きしたとたん、積み上げたクッションのバランスが狂い、すべりやすい繻子の塊はひとつが落ちると総崩れになった。

「わ、わ、わ」

クッションの合間にもぐり込んでいたイエシリーは、それらのなだれとともに床へ転がり出てしまい、へしゃげたまま恐る恐る見上げると、無表情で見下ろすソルーシュがいた。

「大丈夫だよ、ソルーシュ」

イエシリーは言った。彼がことさら読めない顔つきの時は、心配したり動揺している時だ、とイエシリーは知っている。マニンの大きな鼻が脇腹あたりにもぐり、ぐいとイエシリーを持ち上げて立たせた。

「ありがとう」

というイエシリーの声を覆って、

「知っていたのか」

ソルーシュがマニンに問いかけた。ひどく危険な声音だったが、マニンは笑うように鼻を鳴らし、

「こんなところにいるなんて、知るもんかい。あたしは庭で寝てたんだ、あんたがさっき見たとおりさ」

「お前は一緒にいるようなふりをした」

ソルーシュの整った青年の顔が牙をむく蛇の顔に揺らいだ。しかし、

「ちゃんと話して、ソルーシュ」

イエシリーは、ひたと彼を見つめた。緑色の瞳に一步も引かない光が点った。

その瞳の前に剣呑な面影はかき消えたものの、ソルーシュはそのまま無言で部屋を出て行ってしまった。

「話したきゃ話せてことだね」

さすがに長年のつきあいで、彼の行動様式を知り尽くしたマニンが目を細めて言った。

「呪術師戦争のことは知ってるね」

マニンは意外なところから話を始めた。

「デウィンとジアルデルの戦争のあと、荒れ果てた土地を回復させる試みがされた。デウィンの長のアルフリクは荒野に塔を建てて皆を導いたけど、数百年にわたる労働に嫌気がさして、魔法を重視する者たちが現れた」

たったいま読んだばかりの書物の内容をイエシリーはくり返した。

「そう。その者たち、のちに“呪術師”と呼ばれた一統は、魔力を増幅させるためには手段を選ばなかった。イメア輝石のことは知ってるかい？」

「魔力を強めるとして、“呪術師”が好んで使った石。磨けばユーヴァルという宝石で、ドゥニアでもっとも尊ばれるけれど、研磨するとデウィンには使いにくい...だっけ」

「デウィンの魔法は自然の石に添っているのさ。あんたも黄水晶を使うとき、石の織りなす流れに沿って入っていくだろう？ 磨いてしまうと、その道が途切れてしまうんだ」

マニンの確信的な話しかたは、彼女も相当の魔法が使える存在であることを感じさせる。しかし、そのこととなるとマニンはいつもはぐらかし、もはやイエシリーも訊かないことにしていた。

「イメア輝石を手に入れた者がよからぬ動きをしていると知れた時、アルフリクの息子アルバリ

クは石の採掘を規制した。さしも頑固な“石の民”でも、デウインの長の申し入れには逆らえなかった」

ふと、マニンはその時のことを身を以て知っているのではないかとイエシリーは思った。

「しかし、イメア輝石には罠があった。そのことも学んだね？」

「イメア輝石は使う者の魔力を一時的に増幅するけれど、実はそれを吸い取っていて、やがて熟した果実のように壊れてしまう。イメア輝石を失った者は魔力をも失い、何者でもない者となる」

イエシリーはあわてて答えた。

「そう。今の人間が知っていることはそれだけだ」

「それだけ、って、まだ何かあるの？」

言葉尻を捉えたイエシリーにマニンはいったん口を閉じた。その小さな目に底知れない色が現れてくる。しかし、彼女はいつものように鼻を鳴らし、

「さてね。人間の書物は不完全だってことさ。それよりも大事なものは、“呪術師”の一統が勝手にイメア輝石を探そうとしたことだ。なにしろ、イメア輝石がなくなってしまうたらどうにもならない。石があれば、他人の魔力を吸い取って使うこともできるからね」

淡々と言葉を続けた。

「噂じゃ“石の民”は石の匂いを嗅ぎあてるそうだが、そんな芸当のできない“呪術師”たちは何をしたと思う？」

イエシリーは首をかしげた。

「龍を捕らえたのさ。魔法で彼らを縛り、異形のけものに仕立てて苦しめ、彼らの美を求める心を利用して、もっとも美しい石を探させたんだよ」

「それで龍がいなくなったの？」

龍は滅びた古生物だという書物を踏まえたイエシリーの問いに、

「もともと龍はそれほど他の種族とつきあいがいいんだよ。海の果てでひっそり暮らしてるともいうね。だから忘れっぽい人間あたりは、龍などいない、なんぞと言い出すのさ。実在しないと言い張る者までいるんだから、あきれよ」

マニンは苦笑まじりの口調で答えた。

「龍は自尊心が強くてね、自分の美しさを誇りにしてるそうさ。自尊心が強すぎて表には出さないが、自分の賢さも大いに自慢にしてる。まあ、確かにきれいな連中だし、千年生きるというだけあって、たいていの者はそう愚かでもないようだけどね」

「千年...」

龍の寿命についての伝承はいくつか読んだことがあるものの、おとぎ話のように書かれているのと、マニンがこうして話すのではわけが違う。イエシリーはもっと聞きたかったが、

「自分は頭がいいと思っていたのに、まんまと捕らわれて、かけられた術も解けない。つかまった龍の自尊心はひどく傷ついたらろうね。しかも美しさまで奪われる。ほら、そのへんにあるだろう、醜い悪龍の絵本。そんなのは“呪術師”に呪われた龍がもとなんだよ」

マニンは早口で話を続けた。

「気も狂わんばかりの龍に“呪術師”は夢を吹き込む。イメア輝石のもとで眠れ、石がやがて磨かれ、本来の輝きを顕してユーヴァルになるように、そなたも本来の美しさを取り戻せるだろう、と」

ごくりとイエシリーは唾を飲んだ。マニンの話しかたはあまりに真に迫っていて、書物や伝聞からとは思えないものがあった。この7年、眠る時すら離れず慣れ親しんできたマニンとは、まったく違う存在のように感じる。

マニンはイエシリーの緊張に気づいて、やや口つきをゆるめた。

「“呪術師”たちは歪めた龍を世に放った。他のデウインや人間たちは、当たり前だが、突然現れた醜い生き物に驚いちゃった。それを見た龍は、きっと怒りに駆られてしまったんだね、大半は無駄な血を流してる。ただ探すんじゃなくて、苛立って暴れたのさ。暴れる龍は、なかなかデウインの手にも負えなかった」

イエシリーは浮島の上空で争っていた龍たちを思い浮かべた。互いに争う彼らの巻き添えを食うだけでも、あれほどのすさまじさである。こちらへ襲いかかってきた時の恐ろしさは想像もできないものだろう、とイエシリーは思った。そして、ふと思いついて、

「なぜ、龍は“呪術師”を殺さなかったの？」

と訊ねた。大勢を恐れさせるだけの力を持ちながら、なぜ少数の“呪術師”言いなりになったりしたのか、不思議だった。マニンは吹き出すように鼻を鳴らし、

「術が解けないからさ。かけた相手を殺したら、永遠に術は解けないだろ」と、少し面倒そうに答えた。

「もちろん、龍たちは怒ったさ。デウィンの長アルバリクのもとへオルムリンから正式に抗議が入った」

「オルムリン？」

イエシリーは目を丸くした。ついさっき、頭に押し込もうと四苦八苦した言葉がなぜここに出てくるのかわからない。マニンは、ああ、というように三重のあごを上げ、

「龍の一族をオルムリンと呼ぶんだよ。彼らの父祖にして最初の龍王の名からきてるそうだ。二代目がファブニル、だったかな」

「あ、それじゃあ、あれは王による紀元なのね。ほら、変な本の…」

「しーっ」

謎が解けたことに昂奮して、話を唇に持っていきかけたイエシリーを制し、

「おかしな醜い龍が現れて暴れても、アルバリクはしばらく何の対処もしなかった。イメア輝石を禁じたことが裏目に出たのを認めるのが嫌だったんだろうさ。親が偉大なのもつらいもんだね」

マニンはうがったことを言った。

「だけど、事態はそれどころじゃなくなった。まさか、龍王を無視するわけにはいかないからね」

イエシリーは次の言葉を待ったが、豚は急に沈黙した。語ることがないのではなく、湧き上がってくるものが多すぎる、そんな目だとイエシリーは思った。おびたらしい記憶が映じているだろう瞳を覗き込み、イエシリーはうっかりその奔流に巻き込まれた。

冷たい瞳の男が人々の中心にいる。あたりにいる者たちは皆、暗い瘴気（しょうき）のようなものをまとっている。中心にいる男は驚くほど大きなイメア輝石を手にしてしたが、マニンはそれがただの飾りだと知っていた。そのとき、男がマニンの視線に気づいた。

魂の奥まで貫く氷のような目が向けられ、マニンの恐怖と混乱が世界をかき乱した。色と形の断片が渦を巻き、いくつかの恐ろしい面貌や血や呪わしい影が見え、やがてその彼方に黒い巻き毛と薄青い瞳の青年が現れた。そのとたん、イエシリーは渦からはじき飛ばされ、自分自身の体に叩きつけられた。

「いたた…」

衝撃に頭を抱えるイエシリーをマニンは鼻先でつつき、

「馬鹿な子だね、制御を身につけないと大ケガすると言っただろ。あたしの中に入ろうとするなんて」

「ごめんなさい、そんなつもりじゃなかったんだけど」

「まあ、あたしも不注意だった。少し思い出しすぎたよ」

ため息をつくと、悲しげな目になった。

「マニン…」

「大丈夫だよ。話を続けようか」

マニンは鼻先にしわを作りながらも、しっかりした口調で言った。

「アルバリクは“呪術師”たちを塔へ呼び出そうとしたそうだが、遣わされた者は...、見るも無惨な姿で戻されたって話だ」

またマニンの声がふるえた。

「ここに至って、誰もが“呪術師”はとんでもない連中だとわかった。不思議のわざの探求には危険が伴うからね。デウィンたちは、彼らもちょっと研究心が過ぎただけだと思ってたのさ。だけど、他の者を壊すなんてただごとじゃない。デウィンの社会はまっぴたつになって、やがて戦さが始まった」

「呪術師戦争ね」

「ああ」

マニンは物憂く頷き、

「戦争の話はしないよ。ともかく“呪術師”の一味は敗れた、それだけでいい。肝心なのは、“呪術師”たちの置き土産があったことさ」

大きく話を端折った。ところどころ声をふるわせながらも淡々と話しているが、背中の毛がちりちりと逆立っていることにイエシリーは気づいている。

「呪われた龍が残ってしまったんだ。術者が生き残ったものは解放できたが、ほとんどはどうにもならない。絶望した龍たちはさらに暴れ、街を焼き、デウィンや人間を殺した」

イエシリーの脳裡に、マニンが言っていた絵本の挿絵が浮かんだ。「砕いた石炭のような」とよく形容されるとおり、ごつごつした不格好なうろこを備え、裂けた口からふぞろいの牙をのぞかせる醜い龍たちは、この時の姿の名残りなのだろう。

「デウィンは呪われた龍を殺すことに決めた。オルムリンにも了解は得たはずだ。けどさ...」マニンは鼻先にたっぷりしわを寄せた。

「オルムリンにしてみれば、殺されるのは身内だ。愚かだっただけで、デウィンに捕まらなければ罪などなかったものたちだよ。もはや仕方ないことかもしれないが、デウィンにだまされて酷い目に遭わされて、そのうえ殺されるのかって思ったら、納得なんかできないだろ」

イエシリーの顔つきを見て取って、マニンはさらに

「ソルーシュが誰かに捕まって、あのきれいな白蛇が、絵本の悪龍みたいにされたと思ってごらん。あたしが誰かのせいで苦しまぎれに誰かを踏みつぶして、悪い豚として殺されるとしたらどうだい。わかるだろ」

とつけ加えた。イエシリーは強く頷き、そのはずみでばさりと顔にかかった黒髪を鼻息で吹いてやると、

「髪を編むことを教えたほうがよさそうだね。ソルーシュにできるかねえ...」

いつにも増してやさしい声でマニンはつぶやいた。

それから、がらりと違う厳しい顔つきになり、

「やたらな交流はなかったものの、それまでどの種族だろうと好意的に受け入れていたオルムリンが、デウィンも人間もひどく嫌うようになった。まあ、当たり前だろうがね。ただ、特に怒りに駆られた若い龍の中には、デウィンを攻撃するものが現れてしまっただけね」

苦いものを吐き出すように言った。

「呪われていない龍が、デウインを襲ったの？」

問い返したイエシリーに頷いて見せ、さらに驚くべきことをマニンは告げた。

「人間にはよくわからなかったんだろうさ。まだデウインが残りの悪龍を退治してる騒動だとも思ったんだね。だけど違う。デウインがいなくなった本当の理由はそれなんだよ」

イエシリーは言葉を失った。

「もちろん、オルムリンのほうでも攻撃はやりすぎだと考えるものが多かった。それで龍王が交代したという話も聞くが、さすがにそのあたりはあたしにもわからない」

マニンはちらりと庭のほうへ目を走らせたが、未知の話の数々に溺れかけているイエシリーは、それにまで気が回らなかった。

「ともかく結果的には、龍の攻撃はその時代だけで済んだんだけどね」

大きな首を左右に振ってマニンは言い、

「けどさ、数百年、なんとかしようとした土地は、また戦争で荒れてしまった。そのうえ龍に襲われる。そりゃたまらないだろ。この土地に見切りをつけた者が多くいてね、多くは“石の民”の国を越え、砂漠を越えてはるか西方へ去って行った。北方へ行った者もある。ともかく、デウインはそこから極端に減り、年月とともに減る一方になったのさ」

と、イエシリーがまったく知らなかった話をした。

数冊ある不思議な書物のほかは、この浮島にあるのもすべて人間の書物である。デウインの時代の記述は抜けていることも多く、さもなければ推測で埋めてあるだけだった。デウイン崇拝派のオルバンが「デウインは天宮に帰ったのかもしれない」と気取って書きつけていたのを、イエシリーは苦い笑いとともに思い出した。

「あ、でも」

イエシリーは疑問を口にした。

「龍はどうなったの？ 人間だけではどうにもならないでしょう」

「アルバリクの血筋をはじめ、残った者もいたからね。見落とされて、のちの“龍戦争”を巻き起こしたシルシュってやつを除いて、呪われた龍は退治されたし、オルムリンたちも姿を見せなくなった。その時点で去った者もある。それでも、人間たちを愛して残ったデウインもいた」と、昔語りを終えたマニンはイエシリーをまっすぐ視た。

「あんたは黄水晶を使ってあたしらを呼んだ。それができるのはリフィアの血筋だけだからね。あんたが最後のデウインのひとり、リフィアの娘であることは間違いない」

イエシリーは胸を押さえた。心臓がとどろき、マニンの言葉とともに頭の中で反響する。

「リフィアは<エイル>、癒やしのわざを使うデウインだった。命短くか弱い人間に一番必要なものさ。彼らを見捨てられずにドウニアに居残っていたんだが...」

マニンは耳をぱたぱたと動かした。

「最後に会った時には、恋に落ちたと言っていたよ。ドウニアを去って恋人のところへ行くと言った。相容れない種族で、悩んでいるようだった」

言葉もなく、イエシリーはただマニンの顔を見つめている。

「言っとくが、それで別れてしまったからリフィアからは何も聞いてないよ。デウィンと敵対するものはジアルデルと龍。ジアルデルでないことは確かだから、龍なんだろうとあたしが考えただけさ」

「聞いてないの？」

これだけ話して、はっきりしない結論にイエシリーはがっかりした。

「ああ。でも、ソルーシュがあんたのそばにいただろ。そりゃ龍だと思うよ」

「ソルーシュは龍なの？」

「たぶんね。ドウニアの誰も、こどもの龍なんて知らないんだよ。オルムリンは時折あらわれるだけの遠い隣人だからね。ただ、ずいぶん昔、龍は水蛇として300年生きて、それから龍になるって伝説を聞いたんだ。それであの子をガキ呼ばわりしてみたが、あの態度じゃ、どうやら当たってるようだよ」

イエシリーは軽く笑った。その横顔は急におとなびて見える。

「それじゃ、わたしもオルムリンの血を引いてるのかな」

「あんたが人間みたいな外見を捨てようとしたことがあったろ」

イエシリーはまた龍が飛来した日のことを思い浮かべた。白く輝くソルーシュとうろこをきらめかせた龍たちを見て、自分もそういう美しいものに変われないか、念じてみたのだった。しかし、何ごとも起きなかった。

「ソルーシュのように姿が変わるのが龍なら、変われなかったあんたは違う。そうすると、世界のどこかにデウインを嫌う人間の国でもあって、そこの人間と恋に落ちたのか。あるいは“呪術師”たちが滅びてもデウインの中に対立があって、同じ種族の中の敵対する者だという意味だったのか。龍以外の生物、デウインや人間のような外見のなにものかなのか。あたしにもわからなくなっちゃったのさ」

そう言うと、急にマニンは笑うように鼻を鳴らした。

「それでさっき、ソルーシュにかまをかけてみたんだけどね。そこに転がり出てくるまぬけな子がいたもんだから、まあ、台なしだよ」

と冗談めかして言った。肩を落としたイエシリーの額にかかる髪を鼻息で吹いてやり、マニンはやさしく目を細めた。

「あたしはね、あんたに母さんのようになって欲しいんだよ。人間や動物を愛したデウインが、あたしは大好きなんでね」

ふと、マニンの声音のどこかに焦がれるような熱がこもったのをイエシリーは聞き取った。なぜなのかはわからなかった。

「あんたの中でリフィアの血が目覚めたのなら、黄水晶で楽しむばかりでなく、あんたに<エイル>の修行をして欲しいんだよ。薬草や癒やしの術を学んで欲しい」

黙ったままのイエシリーの顔つきを見て取り、

「ソルーシュの許可を取るかい？」

とマニンは訊ねた。ソルーシュはくせのある保護者だが、イエシリー本人には弱い。彼女はそこを見越して、むしろそうして欲しがっているようだった。

いつものようにさわやかな青空のもと、イエシリーは中庭へ出てみた。ソルーシュは泉水の脇に立って、噴き出す清水が小さな水路を流れていくのを見下ろしている。

「ソルーシュ」

呼びかけたとたん、

「わたし、＜エイル＞の智恵を学びたい」

自分でも思ってみなかつた強さで言葉が続き、ソルーシュよりもイエシリーのほうが目を丸くした。ソルーシュは却って落ち着いた目で彼女を見やり、

「これを読め」

ふところから数冊の書物を取り出した。

「薬草学の基礎、デウインの看護術について、＜エイル＞の伝説…。どうしたの？」

「フェルスの大学から借りてきた」

銀髪の上に数粒きらめく海水をイエシリーはぼんやり見つめた。今まで＜エイル＞の技を学びたいと言ったことはない。たったいま、マニンに話を聞くまで、自分に関わるものだと思ったこともない。

「どうして？」

イエシリーはもういちど問うた。ソルーシュは不機嫌そうな顔を背け、

「いつかこうなると思っていた。お前があの鷹を介抱した時から…」

小さく答えた。

初めて浮島に飛んできた時、イエシリーの「呼び声」に引きずられたヒューギンは嵐に見舞われ、弱り果てていた。黄水晶を使い慣れていれば、相手の目であたりを眺め、ようすに応じて「呼び声」を弱めただろうが、幼いイエシリーが知らずに放った「呼び声」は容赦のない強さだったのである。

イエシリーは責任を感じて、鷹が回復するまで夢中で世話をした。その姿に、ソルーシュは＜エイル＞の血を感じていたのだろうか。

「それに、あの豚はいつか自らの考えで押し切るだろうと思っていた。今まで黙っていたほうが驚きだ」

憎々しげにソルーシュはつけ加えた。それからまっすぐイエシリーの緑の目を覗き込み、

「結局はあの豚が正しい。だが…」

ソルーシュの虹彩（こうさい）がずっと細くなった。

「お前はもちろん、豚も知らぬこともある。ともかく、絶対にこの島から離れるな」

これまでの暮らしと変わらないことなので、イエシリーは深く考えずこくりと頷いた。そのようすはひどく幼く見えた。

「では、行こう。すでに何隻かの船に見つかったようだ。陸に近づけすぎたな」

ソルーシュの言葉が終わらぬうちに浮島は沖へ向かって漂いはじめたが、受け取った書物をむさぼるように読み始めていたイエシリーは、まったく気づいていなかった。

スニルベオルの白い峰を掻き切るように鳥の影が横切ってゆく。がれ場の足もとの悪さを忘れ、ハールはその影を追った。

「何をご覧になってるんです？」

同じ岩に登ってきたケルドーが訊ねた。

「おかしな話だが、どこかで見たような鳥だと感じてな」

はらかな黒い点になった鳥影を指さしたハールに、

「よく見分けがつかますね。それに、まさか鳥に知り合いがおられるとは思いませんでした」

ケルドーはいつもの調子でまぜ返した。ハールは小さく笑い、

「そんな気がただけだ」

と、岩を降りた。

スニルベオル山脈の山すそを通る街道は起伏に富んでいる。コル島はフレニン山以外は高い山を持たず、なだらかな丘が連なるばかりだった。丹念に手入れされた耕地ばかり見てきた目には植物の少ない荒野の光景もめずらしく、ハールには面白い道である。

しかし、彼の後ろに続く荷駄隊にとっては進みにくい道であり、護衛ふたりからすると、なによりハールに気兼ねしてしまう道でもあるらしい。野営地で焚き火を囲むと、しばしばその話になった。

「おかしな雲行きだ。こんな道でなきゃよかったんだが、申し訳ありません」

星の輝きが雲に隠されがちなその夜も、ケルドーがそう口を切った。ルマやフェルス三国のうち東を占めるシオールから首都フェルスリグを目指す場合、もっと南寄りの大街道を使うのが普通で、ここほど野宿することもない。天気が思わしくなければなおのこと、南に行けないことが気になるようだった。

ハールは、彼ら三人とは少し離れたところで休んでいる荷駄隊の人夫たちを見やり、

「わたしはかまわない。むしろ面白いくらいだ。しかし、彼らは苦労だろう」

と気遣った。アルドーとケルドーは頭を下げ、

「お気遣い痛み入ります。彼らはこの地方の出身で、山道にも慣れてますから。あの馬たちも山岳向きなんですよ」

「ああ、コルの馬に似ている。がっしりして忍耐強くてよく働く、よい馬だ」

ほほえんだハールに相づちを打って、ケルドーは南方のようすへ話を戻した。

「実は、亡者たちだけでなく、森の抑えがきかなくなってるって噂もありまして」

ハールは眉根を寄せた。

「大森林には“森の賢者”がおわすはずだが」

「ええ。そのローエ殿の力が弱まっていると言う者もおります」

話しながら、ケルドーは小枝を折って焚き火に放り込んだ。

「封印がほころびて、呪われたものたちが蠢き始めたと...まあ、噂ですがね」

ぱっと火花が散り、揺らいだ炎がケルドーの陽気な顔に複雑な陰翳を描いて、とても不吉なもの

のように彩った。

呪われたものたちの正体を知る者はない。ジアルデルの生き残りだという者もあり、もっと古い時代の生き物の名残だという者もあり、“呪術師”の残党という者もある。ただし、ジアルデルにしろデウィンにしろ、はるかに美しい者が多いもの人間とほぼ同じ外見をしているが、呪われたものたちは人間とは明らかに違うという。

「むしろ亡者に似るとも聞くが」

「腐ったような顔をしてるとか、半分骨だとかいうんでしょう。俺、そういう話には弱いんです」

冗談なのか本気なのか、ケルドーが情けない顔をした時、それまでいつものように石さながら沈黙していたアルドーがぼそりと言った。

「見る者の恐怖を映すと聞きました」

ハールは顔を上げてアルドーを見た。

「それはつまり、見る者が恐ろしいと思うものに姿を変えろということか」

「おそらくは」

聞き取りにくいアルドーの声の上に、ケルドーが派手に枝をへし折る音が重なった。先ほどからやたらと枝を放り込み、火をかき立てている。ひょっとしたら、本当に嫌なのではないかとハールは思った。

口を閉じて、ハールは渦を描いて暗い夜空へ立ち上る火の粉を眺めた。コルの夜空は明るい星月夜か、それとも、ここと同じようにさらなる闇が降りているのだろうか。

ふとハールの耳にコルの風のそよぎが聞こえた。よく耕された畑の上に夜空がひろがり、心地よい疲れとやすらぎが家々を包む。角灯が輝く酒場では楽しげな笑い声や歌声が響く。なごやかで満ち足りたコルの宵をハールは思い描いた。

「5年ほど前からようすがおかしいのです。さまよう亡者が増え、昼間でも古い戦に巻き込まれるようになり、呪われたものが森を這い出ているという。さらに西の蛮族がヴァリスの国境を侵しています。フェルスだけではありません。イエルズでは北方の蛮族の侵攻が増え、大公殿下が対策に苦慮なさっているとのことですよ」

沈黙を押し戻すかのように続いたアルドーの話が、ハールをスニルベオルの山麓へと引き戻した。

最初は話の内容よりもその言葉数にハールは驚いたが、必要があれば話す男だったと思い直し、

「西の蛮族と北の蛮族が手を組んでいるようすはあるのか」

と訊ね返した。アルドーは黙って首を振った。それならば偶発的なものかもしれない、と考えをめぐらせたハールの頭に「5年前」という時が引っかかった。それをそのまま、

「その頃、何か変わったことはあったか？」

と言葉にすると、兄よりすばやいケルドーが、

「そういえば、龍を見かけたって話があったのはその頃だったんじゃないか、兄貴」

と話に割り込んだ。

「俺はまだガキ扱いで、市場で手伝いなんかしてた頃なんですけど、大人たちが噂してましたよ。」

兄貴はもう軍隊の見習いだっつろ、何か聞いてないのかよ」

「噂ですが...」

アルドーはハールに向かって、

「ノーアトン港に停泊していたシオールの船が、はるか彼方の上空で龍を見たそうです。沖合は異常に荒れて、波にもまれた船が沈んだとの目撃談もあったといいます」

「あの時か」

ハールは思わず叫んだ。

「それはコルの船だ。多くの者が死に、戻れた者も謎の症状に悩まされた」

アルドーは眉根を寄せ、ケルドーは枝を折る手を休めてハールを見つめた。

「その者が言うには、天地も定かでなくなるほどの波にもまれるうち、海がおかしな色に光るのが見えたそうだ。海の中から光が射し、幾重にも色を重ねながらひろがって、その光に触れた波は鎮まった」

けれども救いには見えなかった、とタウルは語った。そして彼の直感したとおり、光が船に近づくや、船は生き物のように身をよじり、悲鳴に似たすさまじい音をたててへし折れたのだった。水夫たちは海に投げ出されたが、光に染まった海に落ちた者はひとりとして浮かんでこなかった。

「イェルズやシオールの水夫には及ばないが、コルの水夫も決して未熟ではない。簡単に溺れるような者たちではないんだ」

ハールの言葉にふたりは頷いた。交易をイェルズに委託しているため、普段はイェルズやフェルスを訪れる程度のことしかしていないが、コルの船には島国を守る水軍の横顔がある。侵略してきたイェルズを完膚なきまでに叩きのめした海戦は、ドウニアでも語りぐさだった。

「話してくれた者は、板きれに依りながら泳いで光から逃れようとした。しかし、足にしびれるような、感覚が消えていくような、おかしな感じがしたかと思うと動かなくなった、と言っていた」

タウルの足先まで光が及んでいたのだった。板につかまって浮かび、迫りくる光に死を覚悟したとき、彼と光のあいだに大魚が割り込んだ。溺れた者を喰らうつもりだったのだろうが、その大魚は光に捕らわれて激しくのたうち、みるまに海中深く沈んでいった。そして光も、それを最後に消えていったのである。

「他の傷はすぐに癒えたが、光に触れたという足はなかなか治らず、その熱が全身に及んで彼は長く病んだ。＜グーダ＞は未知の毒素に当たったようなものだと言っていたが...」

心を痛めて見舞いに行ったこどもの頃のように、ハールは目を伏せた。

雨の気配がする不穏な風が吹き寄せてきて、榎木（ほだぎ）がぱちぱちとはぜた。ケルドーは太い枝で火をかき立て、

「そもそも、あんな大嵐が起きたこと自体がおかしいって話も聞きましたが」と訊ねた。ハールは強く頷いた。

「あれはわたしの誕生日が過ぎたばかり、秋のことだった。夏の嵐にも冬の大嵐にも遠い時期で、〈グーダ〉にも予見できなかったくらいだ」

「では、嵐も何かの悪意なのでしょうか。目撃された龍と光は関わりがあったのか、そしてそれらが亡者や蛮族の台頭とつながっているのか...」

最後はひとりごとのように、アルドーがつぶやいた。

「あの嵐が6年前。ドウニアが不穏になったのが5年ほど前というなら、何かしらの関わりがあるような気もする。しかし、嵐を操るとなればデウィンにもできぬ技だ」

焚き火を見つめ、ハールもつぶやくように言った。

「嵐となると、龍のほうがあやしいやもしれません。ミーラントの“龍戦争”の時も、天候はずっと荒れていたといいますし」

というアルドーの言葉に応じ、

「おかげで大事な槍を見失って、恥をさらした王もいたっけな」

ケルドーがおどけて言ったが、今夜は誰も乗ってこなかった。彼は軽く肩をすくめ、

「しかし、亡者やら蛮族を煽って俺たちに危害を加える理由が、龍にはないでしょう」

まじめな口調になって指摘した。ハールは大きく頷いた。

「とはいえ、我らは龍についてろくに知らない。“呪術師戦争”に龍を巻き込んだことで、龍はますますデウィンと人間から遠ざかり、我らの中にも、それ以前に知っていた本物の龍とは違う姿が根づいてしまった」

ハールの淡青色の瞳に炎の黄金が映り込み、揺らいで踊った。風は不穏さを増している。

「友人が言っていた。古くに龍のことを書いた文書は、大量に消えてしまっているそうだ。まるで、龍が我らの記憶からすら消えようとしたかののように」

「へえ」

ケルドーは目を丸くし、

「それじゃ、ますます人間の近くになんて現れそうもないのに、なんだって出てきたんでしょう」

と言った。ハールはつと顔を上げた。

「出てこなくてはならない理由があったとすれば、龍を出てこさせたその理由こそ、亡者や蛮族を動かすものと同じかもしれない。しかし...」

あごに手を当てて慎重に考え込んだハールは、

「龍がドウニアに関わる気なら、それらの手を借りる必要もなからう。シルシュ1匹でミーラントはもちろん、ドウニア全体が危機に陥ったのだから。デウィンの可能性もないだろう。アガト

の言うとおりに、デウィンが天宮の者のような清らかな存在ではなくても、“塔の賢者”に人間を害する理由はないはずだ」

「むしろ、面倒だから関わりたくないという御方ですから」

めずらしくアルドーが辛辣な言葉をつけ加えた。ほう、と兄を見つめ返したハールに吹き出し、「兄貴は“塔の賢者”さまが嫌いなんですよ。王さまの使いで、あの塔に行かされたことがありまして」

とケルドーが暴露した。

イェルズの中に独立した領地を持ち、アルフリクのそれを再現したといわれる塔に住まう「デウィンの長」に会った者は少ない。ハールは思わず身を乗り出した。

「ジルニトル殿に会ったのか」

というハールの問いに、アルドーは黙って頭を下げた。普段のハールは他人のことを聞きほじるのは好まないが、この場合は好奇心のほうが勝った。

「どのような御方だろう。それに、塔は入り口がないと聞くが、どうやって入ったんだ？」

「隠し扉があるに過ぎません。雪花石膏と透明の水晶から成り、白く輝く美しい塔ですが、住まう御方と同じく、見かけを飾ってあるだけです」

「手厳しいな」

笑い流そうとしたハールだったが、アルドーはにこりともせず、

「ミーラントで人間を見放した方です。思ったとおりの尊大な方でした」

はっきり言い切った。

「150年も前の戦争のことを兄貴が怒ることはないだろ」

からかうようなケルドーの声がその場に立ちこめた気まずさを払った。

「人間がねずみを大事にしなかったとか、敬意を払わなかったとかいって怒るヤツはいない。デウィンにとっちゃ、そういうことさ」

「辛（から）いな、君は」

ハールは苦笑した。ドウニア周辺の間人として、ハールも、デウィンに対する無意識の敬意や好意を刷り込まれている。とって、フェルスの兄弟の言葉を否定するほど石頭でもない。だいいち、人間がデウィンはどう評価しようと、デウィンはデウィンであり、デウィンであり続けるだけだった。

「ジルニトル殿以外、フェルスの亡者に加えて西と北の蛮族をいちどきに動かせる者があるだろうか」

ハールは話を戻した。

「行方不明のデウィンがたはどうなんでしょう」

ケルドーが言った。

「“風の賢者”が行方知れずになって200年は経つ。むしろ彼はドウニアを去ったと見るべきだろう。リフィア殿も数十年前から消息がわからないというが...」

三人は顔を見合わせた。

「かの<エイル>が人間を傷つけるとしたら、世の終わりだ」

遠くで雨になったのか、ひんやりした風が吹き寄せてきた。炎が靈妙な形を描いてなびく。

「デウィンには理由が見いだせない。残るは人間だが、人間の陰謀とは思えぬ。たとえ蛮族をそそのかす巧みな口舌（こうぜつ）があり、亡者と取引できる何かを握っていたとしても、そのすべてをあやつるとなると人間の智恵で動かせる範囲を超えていると思う。人間のしわざならば、レギン王だとして見逃しはなさるまい」

考えを言葉でなぞるようにハールが言った。

「そうすると、全部をつなげて考えるのは無理があるってことですか」

「わからぬ」

偶然にしては時期がそろいすぎている。だが、龍の動向から何かを読み取ったものたちが、てんでに動き始めたとも考えられる。

「レギン王のような目を持たぬ我らには、読み解けないということだな」

手を広げて肩をすくめたハールの顔を、ケルドーが覗き込んだ。

「王子、お尋ねしたいことがあるんですが」

ハールが促し顔を向けると、ケルドーは目を輝かせ、

「先ほどおっしゃった、“誕生日”とは何ですか」

興味津々といったようすで質問した。ああ、とハールは頷いた。

ドウニアには誕生日を祝う習慣がないとは聞いていたが、誕生日という考えそのものがないらしい。コル島では当たり前のことが、ドウニアでは不思議なことになるのか、とハールは面白く感じた。

「誕生の日を憶えておいて、毎年それを祝う習慣がコルにはあるのだ」

「へえ。さすが暦の国ですね。俺たち、生まれた季節はともかく、日にちまで知りませんよ」

ケルドーは面白そうに言って、なあ、というようにアルドーの顔を見た。

「暦の国、か」

コルの<グーダ>はドウニアの誰より天文に通じているという。その知識を活かして作られる暦は精緻なもので、ドウニアを束ねるフェルス王も、コルから届けられるこの暦をもとにして治政をおこなうのだった。

まさしくそのためにフェルスリグへ向かって旅をしているというのに、突然、ハールの頭裏に思ってもみなかった疑問が湧いた。

「フェルスには大学がある。多くの学者もいる。コルに任せなくとも、こうして運ばずとも、やりかたさえ学べばフェルスで暦を作れるのではないか？」

一瞬きょとんとしたケルドーが、

「無理だから、こうして運んでおられるんでしょう」

と笑った。しかしハールは真顔で首をふった。

「簡単とは言わぬ。だが、コルの<グーダ>以外にはできぬ技とも言えない。わたしもいくらかの手ほどきは受けた。その上で、たとえばバルデルのような、天文に関心を寄せている学者であればできるはずだと思うのだ」

途方に暮れたような顔つきで、

「それじゃ、何だってこんな旅をなさってるんです？」

ケルドーが問い返した。ハールにも答えはない。それが習わしであるから、今まで何の疑問も感じずにきた。むしろハールこそ、ケルドーと同じ問いを誰かに投げかけたかった。

「暦は王のものです」

アルドーが不意に言った。

「それは…」

どういう意味だと問おうとした時、暗い空を切り裂いて稲妻が走った。いきなりの突風に焚き火の炎が叩きのめされ、あたりは真闇に近くなる。三人が雷雨を覚悟して立ち上がると同時に雷鳴がとどろき、一行の上へ大粒の雨が打ちつけるように激しく降り注いだ。

悪意の術かと思うほどの雷雨を最後に晴天が続き、今日も天気誘われた荷駄隊の中の「名手」がほれほれするような声で歌っている。コルのものとも、おそらくフェルスのものとも違う、哀感を帯びた歌は山岳の民に伝わるものなのだろう。異国の歌に耳を傾けながら、不思議とハールの心はコル島へと運ばれていった。

ずんぐりとした辛抱強い馬が峠道を登っていく。ハールがその背にある穀物の育った畑を思い描いていた時、先に峠を登りきったケルドーが笑顔でふり返った。

「王子」

呼びかけに応じ、ハールはすばやく馬を御（ぎょ）して峠道を駆け上らせた。

大きく視界が開け、いくつかの白い雲を浮かべた青空が果てしなくひろがった。眼下には草原と橋のかかった川のある谷が見渡せ、その西端は急激にせり上がった高台になっている。スニルベオルの山脈から南西へ分かれる山々が背後に迫り、高台の縁から遙かその山頂まで、壮麗な石造りの城壁が築かれていた。

声もなく巨大な建造物を見つめるハールに向かい、ケルドーがおどけて深々とお辞儀した。

「フェルスリグへようこそ、王子」

一行が峠をくだり、谷の草原へ降りるにつれて、さほどでもなく見えた川の広さがはっきりしてきた。橋のたもとには橋と同じ石造りの建物があり、どうやら関所の役割を果たしているらしい。ハールたちと同じくらいの人数の旅人がたむろしていて、そのあいだを行き来する兵士の槍が明るい日射しにきらめいた。

「あの川は天然の防備となっております。そのせいか、ロヴァルって名前なんですよ」

太陽を映す川面を指してケルドーが言った。その物言いにハールは軽い疑問を感じた。

「ロヴァルは古代フェルスの王ともいわれている。彼にちなむ地名があっても不思議ではないだろう」

「へえ、そうなんですか。王子はロヴァルにくわしいんですね」

ルマ自治領での大嘘にひっかけてケルドーは笑ったが、ハールはますます訝（いぶか）しく思った。ケルドーは物知らずの兵卒ではない。それなのに、自分の祖国がロヴァルゆかりの土地であるという、おのずと関心が向きそうな説をまったく知らないというのは不自然な気がした。アルドーはどうだろうかとその表情にとぼしい顔へ目をやった時、ハールは雷雨の夜に彼が口にした言葉を思い出した。

「アルドー」

ハールは彼に向き直って尋ねた。

「先日、暦は王のものだと言ったな。あれはどういう意味だったんだ？」

「申し上げたとおりの意味です」

アルドーがぼそぼそ答えた。

「暦はコルの王からフェルスの王へ贈られ、それぞれの王がお使いになるものです。誰が作り、どのように用いるか、お決めになるのは王。そのようなつもりで申しました」

「なるほど」

いささか拍子抜けした気分でハールは答えた。

話すうちにも川は近づき、関所の前で順番を待つ人々の喧噪が遠く聞こえはじめた。彼らの風貌もいづらか見分けが付き、イエルズの衣装をまとった人数が多いことを見て取ったハールは顔をしかめた。

「うっとうしい先客ですね」

同じく嫌な顔をしたケルドーがつぶやいた。

「ほう。フェルス人もイエルズの人間が苦手か」

ややからかうようにハールが問うと、

「アラリク王子あたりは知りませんが、イエルズ人を好きな兵士はいませんね。彼らは王や王子には愛想がいいが、俺たちには横柄です。関所で勝手な文句をつけてくるのはたいていあいつらだ」

ケルドーは苦々しげに言った。“塔の賢者”を非難した時のアルドーの顔つきを思い出し、思ったより似た兄弟なのだな、とハールは心ひそかに笑った。

橋に着いてみると、状況は思った以上にやっかいであることがわかった。手前にいる人間の大半はイエルズの装束を身につけていたが、その胸元には大公家の紋章が入っている。建物に近いところには大公家の旗を掲げた者もいて、イエルズ大公家に連なる誰かしらがいるらしかった。

アルドーはすばやく馬から下りて人群れを縫い、関所の建物へ向かっていった。その背に罵声を浴びせる者すらいる。ケルドーはうんざり顔を背け、口の中で何やらつぶやいた。

「少し時間がかかりそうだな」

ため息混じりにハールが言うと、

「いえ、すぐですよ。コルのご使者はどこのどいつより優先するよう、王命が出てるんです」

鼻息荒くケルドーは答えた。その言葉に応じるように建物から兵士が出てきて、イエルズの一行に道を空けるよう呼びかけた。ぐずぐず動かない者のところへは駆け寄って促している。総じて手荒な態度はなかったが、割り込まれた形のイエルズ一行は激昂した。

「何のつもりだ。イエルズ大公を軽んじるのか」

ひととき大声で叫んでいる男がいる。衣装の華やかさと上質さからして公族らしく、一行の中心人物だろうと思われた。

アルドーが近づいて何か話した。相変わらず必要ならばよく動く口だ、とハールが半ば笑いを含んで眺めていると、公族の男がアルドーを突き飛ばした。ハールはぎょっとした。いくら腹立たしくとも、他国の兵士に手を出すのはやりすぎだった。すでにケルドーは身構えている。

「失礼する、イエルズの御方」

ハールは大声で割って入った。ふり返った男の顔に、若年のハールを侮る色がありありと現れた。

「申し訳ないが、我らが王の届け物を優先せよとの王命らしい。フェルス王のご意向ゆえ譲っていただきたい」

ひるむことも力むこともなくハールは言った。しかし、

「コルの使者ごときが指図するつもりか。わたしはイェルズ大公の弟スヴィーウル、名を持たざる者の指図は受けぬ」

尊大にあごを上げ、スヴィーウルは言いつのった。

「イェルズの大公弟であられるか」

ハールは見下げるような視線を冷静に見つめ返し、

「ならば、兄君の名を汚すようなふるまいはなされぬがよろしい」

びしりと言った。スヴィーウルの顔にあざけりと怒りが兇悪な影を作ったが、もはやそれはただの尊大や傲岸ではなく、常軌を逸しているとしか思えなかった。イェルズ人たちも押し黙ってなりゆきを見ている。

「小島の田舎者め、我が身をいっばしの貴人だとでも思っているのか。剣を振り回して王侯に並んだつもりか。そなたらは土に巣くう蚯蚓（みみず）も同じ。蚯蚓の王に仕えるそなたは何者だ」

「あんたはいったい何なんです、いいかげんに...」

わめきながら前へ出ようとしたケルドーを押さえ、ハールはゆっくりとスヴィーウルの前に進み出た。

「その蚯蚓に大敗したのがイェルズ軍であることをお忘れなきよう」

口の端に刻んだ笑みを納め、

「農事は命の基本を生み出す。我らはドウニアの多くの命を支え、それを誇りとしている。虚勢を張る王侯に屈する理由はない」

さらに厳しい口調でハールは言った。

「そこまでにしていただく、コルのご使者」

第三の声割が入り、皆がいっせいにその声のほうをふり向いた。

その場にいたすべての兵士が姿勢を正した。

橋の上には美々しい武具に身を固めた上級軍人が居並び、その胸甲（きょうこう）に打ち出された王家の紋章を見れば、彼らに取り巻かれている若い男が誰であるか、ハールにも見当がついた。

。

眉間に神経質なしわを刻みながら男は橋から降りる石段に近づき、しかし石段の手前で足を止めてハールを見やった。

「コルのご使者、通られよ」

おや、とハールは思った。出向いてきたわりにはおかしい態度である。ケルドーにちらと視線を送ると、彼は橋上から見えないように口を歪めて見せた。しかしともあれ、さしものスヴィーウルも不承不承ながら退いたので、ハールは石段へと進み、橋の上へ向かって会釈した。

「アラリク王子とお見受けする。わたしは...」

「すまぬが、関所が滞っている。お話は城で伺おう」

ハールの言葉をさえぎり、アラリクはさっさと背を向けて橋を渡りはじめた。やむなくハールはその後に続き、アルドーとケルドー、そして荷駄隊がその背後に連なった。ところが、橋を渡りきったところでアラリクが足を止め、ふたたび行列は渋滞した。

「コルは通した。イェルズも礼を尽くして通さねば不公平だろう。まして、相手は身分のある人物だ」

「しかし、王子」

近衛の隊長とおぼしき軍人がアラリクに反論した。

「王は、コルのご使者を城まで先導せよと仰せられたのでは」

「いかに父上であっても、他国の貴人が関所に重なるとはお思いにならなかったのだろう。このまま無礼を続けては、かえってお叱りを受ける」

そう言うなりアラリクはハールをふり返り、

「そのようなわけだ。申し訳ないが後ろが滞ることのないよう、先を急いでいただきたい。わたしはこれで失礼する」

と、せわしなく告げた。ハールは無言で頭を軽く下げた。アラリクの削げたような顔に不興げな色が表れたが、ハールはあえて無視した。

さきほど反論していた隊長が人数をすばやく分け、王子が橋へ戻っていく後を追わせる。それを睨みつけていたアルドーが進み出て、ハールの前で深く頭を垂れた。

「これは王のご意志ではありません。お許してください、ハール王子」

周りに残った近衛兵たちを眺めわたして、ハールは破顔した。

「ほう、わたしの名を聞いても驚くようすがないな。アラリク王子のあの態度は、わたしを知らぬゆえかと思ったが」

一同が気まずく沈黙する中で、ケルドーが目をくるくるさせて歌うように言った。

「あの気詰まりな御方と城までご一緒するより、俺たちだけでのびのび歩くほうが面白いってもんですよ。いろいろと楽しい場所もお教えしたいところですし」

「いい加減にしろ。悪所へなどご案内するなよ」

苦笑いした隊長が先頭に立ち、一行は都の門へ続くゆるやかな坂道を登りはじめた。

ー フェルスリグは美しい都である。スニルベオルの向こうで数々の不幸が起きている時も、はるか昔、デウィンから人間が譲り受けたこの場所にまでは波及してこなかった。人間たちは栄えてひろがり、フェルス、ヴァリス、シオールの三国に分かれて、時に激しく覇権を争うこともあったが、他のいくつかの街は滅びても、麗しの都フェルスリグは一度も戦火にさらされたことがなかった。デウィンの魔法に守護されているという噂もある。ー

ハールの頭裏にむかし読んだ本の一節がよみがえった。

戦火を受けたことのない都には、千年以上前にデウィンが好んだという自然石利用から「篡奪（さんだつ）王」レイフが持ち込んだシオール様式の木造、エアルワールドから続く現王室好みのタイルの多用まで、さまざまな建築様式の建造物が混在している。都そのものが歴史絵巻といってもよかった。

庶民でにぎわう市場といったよくある眺めでさえ、その背景に「三国戦争」当時の面影をとどめた宿屋があるとなると趣が違ふ。なるべく沈着に進もうとしているのだが、気がつくとならこちらと見回してしまっているハールだった。

にこにこしながらそのようすを見ているケルドーに気づき、

「大学はどのあたりだろうか」

いくぶんかは照れかくしでハールは訊ねた。

「大学は西門に近い場所です。山手になりますが、ここからは見えません。王城に入る橋からなら学堂の屋根が見えますよ」

手際よく答えたケルドーは、

「大学に興味がおありですか」

と不思議そうに首を傾けた。

「ああ、親友がいるのでな」

ハールはやわらかく微笑んだ。胸の中に、ヴィトとともにコルの丘で吸い込んだころよい空気が満ちる。

「コルの御方ですか。そう、少ししか拝見してませんが、あの島は本当に美しい島ですね。俺はコルが大好きになりましたよ」

とケルドーも微笑み、ころもち胸を反らして、

「なにしろ俺や兄貴も、コルの作物でできてますからね」

と言った。ああ、とハールは頷き、

「さきほどわたしが言ったことは、その親友から教わったことだ」

「へえ」

ケルドーはまた目をくるくる動かした。

「大学へ会いに行かれるんですね。そりゃ、俺もお供するのが楽しみだ」

ハールはケルドーの言葉にとまどった。

「君が供をするとはどういうことだ。王城に着けば君たちの任務は終わりだろう」

「ああ、俺も兄貴も王子にぴったりくっついてるように命じられているんです。アルドリドのお屋敷へ無事お帰りになるまで、です」

ケルドーはそう言ってうれしそうに笑った。素直に好意を表してくれる顔へ微笑みを返ししながら、ハールは心底で首をかしげた。それはレギン王の厚意なのか、それとも監視なのだろうか。

橋から学堂が見えるというケルドーの言葉を確認することはできなかった。

一行が橋にさしかかると、城門にひとつの影が差した。近衛に囲まれたアラリクとは異なり、ひとりの供も連れていない。しかし、その黒衣の人影が誰であるか、わからぬ者はいないだろうと思われた。

ハールもその人物から目が離せなくなった。船上の夢に現れ、トゥーリッドの面影とすり替わった、背の高い何者かに似ていなくもないが、威圧感のすさまじさは格段の差があった。コルの軍を率いてあの人物と戦うとしたら、ためらいなく挑んでいけるだろうか、とさえハールは思った。

張りつめた空気が一行を覆っている。ケルドーすら口端に緊張が表れていた。近衛隊長の歩調が少しずつ早まっていく。

ハールはついに、フェルス王の燃える石炭のような目を見た。カラスに身を変えて国じゅうを飛び回るといふ噂どおり、王はどこか狡猾で酷薄な感じがしたが、卑しいところはひとつとしてなく、善悪の彼方を見据えているような深遠さがあった。

エアルワールド以降、フェルスの王位を継ぐと得るといふ紅蓮（ぐれん）の瞳が近衛隊長に向けられ、

「我が世継ぎはいかがした」

とレギンは訊ねた。思いのほか、やわらかい声だった。

「申し訳ございません、王子は…」

「謝罪は不要、愚かなのは我が息子だ。だが、あれのために兵を割くことはなかった。わしはコルのお世継ぎを礼を尽くしてお迎えせよと命じたはずだ」

やわらかいが、心のどこかを押しひしぐような声だった。頭を垂れた近衛隊長の額から汗がしたたる。レギンは彼から目を外し、ハールをひたと見た。

「ようこそお越しくだされた、コルのハール王子。我が国の不手際をお許しくだされよ」

「相応以上の厚遇を賜りました。感謝いたします」

なんとか言葉を返したが、我ながら声がふるえていたような気がする。闇をも見透かすといわれる王の目は、ハールの恐れやたじろぎも見通しているのかもしれない。ハールは小さく息をついて腹にちからを込め、落ち着いて、ひざを折る正式の辞儀をしようとした。ところが、レギンはハールを肩を押さえてそれをとどめた。

「そのような辞儀は無用、コルはイエルズともミーラントともアイシアとも異なる。それゆえわしはここへ出向き、あなたをお迎えしたのだ」

そしてレギンはハールと並んで歩き始めた。ドウニアのどの君主とも階ごしにしか接さないフェ

ルス王が、小国コルの若者と一緒に歩く姿を、皆が呆然と見つめている。

麗しの都の中でも、王城はことのほか美しかった。書物や絵画でしか見たことのない、古風で堂々とした建物や贅をこらした装飾が目を惹く。しかし今のホールには、それを眺める余裕がなかった。

美しい中庭に面した部屋へとホールは案内された。

「まずは旅の疲れを癒やされよ」

レギンはそう言い残して去って行き、入れ替わりに若い侍女が着替えを持ってやってきた。広い部屋の端に湯槽が置かれ、すでに湯が満たされている。旅塵（りょじん）を払いたくはあったが、侍女が出て行かない。それどころか、侍女は湯に香草を入れたりやわらかい布を用意したりして、入浴の介添えをするつもりらしかった。

「ひとりで大丈夫だ。退がってくれ」

どこか艶めかしい侍女は口惜しげな流し目をくれて出て行った。動じなかったつもりだが、顔が赤らんだような気もする。ホールはため息をつき、王城暮らしも面倒なものだと思った。

長椅子の背にもたれ、ホールはようやく落ち着いて部屋を見渡した。

壁はガラス質の輝きを持つタイルが組み合わされ、規則的なもようを描いている。タイルの色合いに精妙な変化を持たせてあるので、森や海を眺め渡すような奥行きが感じられた。床は磨き上げられた大理石で、コル人も好むアイシアの絨毯が敷かれている。龍戦争をモチーフにしたと思われる、絵画のような織り模様を目で追ううち、ホールは戸口の陰に誰か立っているのに気づいた。

「そんなところで笑っていないで、入ってこい」

ホールが苦笑まじりに声をかけると、

「笑ったりしてませんよ」

ケルドーがすぐに応じ、

「だけど、いきなり追い返すとはもったいないことをなさいました。きれいな侍女じゃないですか」

首を振りながら入ってきて、最後は湯槽へ目をやり、

「言っときますが、俺は湯浴みのお世話はしませんよ」

とぼけた顔で冗談を飛ばした。

「こちらもお断りだ」

笑いながらホールも言い返し、

「休まなくていいのか」

と真面目な護衛を気遣った。ケルドーはにっこり笑った。

「兄貴と交替で家へ帰ります。俺たちも汚れくらい落としておかないと、謁見の間に入れませんかからね」

「謁見はいつになる？」

ホールは訊ねた。レギンはこの先の予定には何も触れずに行ってしまった。

「たぶん晚餐の前に。アラリク王子とのことがありますからね」

歓迎を表す宴の前にもつれを正すというのだろう。なるほど、とハールも頷いた。

「ところで、学堂は王城からは見えないのか」

ハールの言葉にケルドーはにやりと笑った。

「ああ、やっぱり景色なんぞお目に入りませんでしたよね。たぶん、中庭の向こうの回廊からはご覧になれますよ」

湯浴みを済ますと、ハールは少し散歩してみる気になった。中庭の美しさがハールを誘う。それに、回廊からの眺めも確かめてみたかった。それほど学堂を見たいわけでもないが、どうも気にかかるのは、どこかで見知らぬ国に心細さを覚えているのかもしれない。ハールは小さく苦笑いして中庭へ踏み込んだ。

ケルドーと交替で入り口に立っていたアルドーが飛んできて、すぐ後ろを歩く。

「庭を飾る才能は、フェルス人に遠く及ばないな。コルでは庭は作業場だ。にわとりやあひるも駆けまわる。こんな像を置いても、邪魔だと鳴きわめかれるだけだ」

天宮の民らしき黄金の彫像を指してハールは笑った。アルドーは軽く頭を下げただけで顔つきは変わらない。それを悪く受け取る気はないが、話が續かないのも確かだった。ふたりは黙って中庭を進んだ。

大輪の花のアーチをいくつかくぐり、入り組んだ生け垣を抜けてみると、回廊は少し高い場所にあることがわかった。木立と小さな花をつけた灌木の向こうに階（きざはし）が見え、ハールはそちらへ向かって歩いた。その頭上から突然、昂ぶった声が降ってきた。

「わたしは悪いと思っております」

アラリクの声だった。

「コルの領主の息子同様、イエルズ大公の弟にも礼を尽くすべきでしょう。そもそも、なにゆえイエルズではなくコルの領主が“王”なのです。イエルズのほうがよほど国力がある。一度まぐれで勝利したくらいで、小島の農夫を勇士とは呼べますまい」

「戦を好み、領土をかすめ取り、何かと欲を見せる者は何と呼ぶのだ？」

レギンの声は溶けた鉄のようだった。

ふたりは回廊で話しているらしい。木立が目隠しになって、ちょうどハールたちが見えないのだろう。

「イエルズが北の国境を押さえているからこそ、北の蛮族は南下できずにいるのです。コルが何の役に立ちます？ 東ヴァリスの穀倉地帯があれば、コルなどなくてもフェルス三国は困りません」

「アラリク」

ふとレギンの声が揺らいだ。

「そなたはまだ何も知らぬ。燃える目を持たぬうちは、わしの言葉に従うのだ」

コルを出てから初めて、ハールは父アードールのことを思った。恐れを知らず、多くの人間に恐れられるフェルス王の急所を見た気がした。しかし当人にはそれがわからないらしい。そこから立ち去る乱れた足音がして、回廊の会話はそれきり途絶えた。

相手が自分に悪感情を抱いていると知りながら、同じ時を過ごすのは愉快的ことではない。正式な謁見も晩餐も、ハールには気詰まりなだけだった。

ふたりの護衛に先導され、曆を納めた箱を携えて謁見の間に入ったハールをレギン王は玉座を降りて迎えた。とまどったハールに、

「これがしきたりだ」

とレギンは告げた。ハールは反射的にアラリクの表情を窺った。父王の玉座の脇に立ったなりのフェルスの王子は、ごくくだらない行事につきあわされているといった表情で、ろくにこちらを見てもいなかった。

平静を装い、内心で修養が足りないと自分を叱りつつも、ハールにも波立つ感情はある。

晩餐に至っては、もともと愛想がよいわけではない王と不機嫌な王子、そしてそのふたりに気を遣う高官たちに囲まれ、皿に載ったコルの豆に同情したハールだった。こんな不味い食べかたをされるために、島の民が育てたわけではない。

「そうか、もっともですね」

ハールの言葉を聞いたケルドーは目を丸くして頷いた。都育ちの彼にとっても、コル人の視点は新鮮だったらしい。ハールが使っている客間に飾りのように置いてある果物を、彼は複雑な顔で眺めた。

「姫はおいでではなかったのですか」

アルドーがぼそりと言った。護衛ふたりは廊下の端で待機していて、晩餐会のようなすは知らずじまいだった。

「ああ、体調がすぐれぬと聞いた」

ハールが答えるなり、ケルドーが吹きだした。

「それはありませんよ。きっとまた何かしでかして、部屋に閉じ込められてるんでしょう」

「ほう」

ケルドーは面白そうに

「こう言っちゃ何ですが、面白い姫君ですよ。フェラリスさまが晩餐の席におられたら、さぞ見物だったでしょう。少なくとも、ビールの味はぐっと上がったはずですよ」

と続けたが、会ったこともない姫の話はハールの興味をそそらなかった。

生返事をして立ち上がったハールは、中庭へ向かって開け放たれた窓に歩み寄った。乾いた空気が心地よい夜で、月が冴えて見えた。

ふと、同じこの夜のなかで、亡者たちが生前の恨みをむき出しに戦っていることをハールは思い浮かべた。すぐそばの木陰に何かひそんでいても不思議ではないほど、近々とした感覚だった。

。

「明日は大学へ行く。王の許可は得た」

自分の声が少し遠くに聞こえた。月光を浴びて白く浮かび上がる、死んだ馬に乗り、紙の王冠をかぶった古（いにしえ）の王の姿を見たような気がした。

フェルスリグは高山へと連なる峰のひとつに築かれ、さらに高い山頂までを範囲としている。もっとも高いところは王城の砦や物見台、烽火（のろし）台など普通には出入りするところではないが、街区も斜面が多く坂だらけだった。

大学へ向かう道も坂道で、下のほうには学生相手の酒場が軒を並べ、給仕女にしては少々派手すぎる女たちの姿も垣間見える。女たちは目ざとくケルドーを見つけ、争って甘ったるい声をかけてきた。笑顔で挨拶を返しながら、

「兄貴が一緒になかったらなあ…」

とケルドーがハールを横目を見た。近衛隊長が言った「悪所」へと案内したいらしい。しかしアルドーは眉ひとつ動かさずハールの脇を固めていたし、肝心のハールは兄弟の落差を面白がって笑っているばかりだった。

しゅしゅ女たちに手を振ったケルドーをしんがりに、さらに登ると両脇の店も落ち着いてきて、静かな食堂や茶房に混じって書店や文房具を扱う店が続き、やがて坂の上に、どっしりした木の扉を備えた門が現れた。

三人は扉を叩いてみたが、返事はなかった。

「どうしたんでしょう。学生の誰かがいるはずなんですが」

「錠はかかっていないようだ。入ってみるか」

ハールが何の気なしに扉を押して踏み込んだとたん、その喉元に白刃が突きつけられた。

「動かないで。動けば容赦はしません」

その声を聞いて、ハールはとっさに剣を奪い取ろうとした動きを止めた。声は若い女のものだった。

ハールの前に数人の兵が現れて剣を向けた。そして門扉の陰からすべり出てきたのは、若いというより幼女の面影をとどめた少女だった。

「君たちは何者だ」

「それはこちらが訊ねたいことです。そなたは何者？」

少女の言葉が終わらないうちに、ハールは身を低くして正面の兵のふところに飛び込み、一撃を入れて剣を奪った。その剣が閃くや両脇の兵の剣がはね飛ばされ、残りの兵の喉元に刃先を突きつけた形でハールは少女をふり返った。

「君は何者だ」

問いをくり返した時、あわてて飛び込んできたケルドーとアルドーがはっと少女の前にひざまづいた。ハールは剣を突きつけた兵に目配せして退かせ、少女のほうへ向き直った。

「フェラリス姫か」

フェラリスは怒りと驚きと賛嘆が入り混じった目をまっすぐハールに向けた。暮れゆく空のような色の瞳は澄み透ってうつくしかった。

ハールはすぐに剣を投げ捨てた。すると、どこにいたのか、小太りの学生が駆け寄ってきて、

「コルのハールさまですね、失礼いたしました」

息を切らしながら叫んだ。

「まあ」

動揺したフェラリスは学生を睨んだ。

「ハールさまがお見えになるのなら、なぜそう言わないのです」

学生は丸い頬をふくらませ、

「姫君が突然いらしてあれこれお尋ねになるから、ハールさまのお出迎えもできなかったのです。だいたい、あんなにいろいろ訊かれたら、他のお話をするひまなんてありません」

ぶつぶつ言い返した。

フェラリスはハールをふり返り、少し照れくさそうにほほえんだ。みずみずしい花が朝日に照らされて開くような笑顔だった。

「失礼しました。わたくしはレギンの娘フェラリス。昨夜はお目にかかれなくて残念でしたわ」言葉を切って、フェラリスは剣が散乱する周囲を眺め渡し、

「これでは、今夜も晚餐をご一緒することはできないでしょうね」

とふたたび笑顔を見せた。この花顔の前にすべての男がひれ伏す日がくるだろう、とハールは思った。

「何かあったのですか」

「ええ。大学の書庫から貴重な本が数冊、盗まれたのです」

フェラリスは眉を寄せ、さらにおとなびた表情になった。

「大学に入るにはこの門しかなく、学生が交替で門番を務めています。しかし、あやしいものを見た者はいません。障壁には王家の名による封印がなされていて、乗り越えることはできません。どうして消えてしまったのか、誰にもわからないのです」

「それで調べておられるのですか」

「昨日、図書司（つかさ）を務めておられる方から盗まれた本の名をうかがいましたの。読みたかった本が入っていたので、かっとなってしまって」

澄んだ水がきらめくに似て、フェラリスはいたずらっぽい笑みをちらりと浮かべた。それから、ああ、というような顔になって、

「あの方はコルの方とうかがいました。図書を任されるのは最優秀の学生のみ、その司なのでから...、コルの方は優秀ですね」

「ほう、ヴィトが図書司なのですか」

ハールは破顔した。大切な友が大国フェルスでも認められ、重要な役を任されていることがうれしかった。そのさわやかな笑顔を、フェラリスは吸い寄せられるように見つめていた。

## CLARITY第一部(上)

<http://p.booklog.jp/book/97111>

著者：溪美居堂くまら

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/return1017cavydo/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/97111>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/97111>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ